

第5章 物集女城跡の発掘調査成果

1 既往の成果

物集女城跡は、向日市物集女町中条に位置する中世の城館跡である。標高 28.8 m の扇状地縁辺部に立地する。また旧石器～近世の集落跡である中海道遺跡と重複し、その中央部にあたる。

物集女城跡第1次調査は、昭和 56 (1981) 年の『向日市史』編纂事業にともないおこなわれた地形測量である。作成された測量図をもとに、南北 75 m、東西 100 m の規模を有し、西側の高台部分を主郭、東側の低地部分を副郭とする複郭構造の城館として復原した。

第2次調査がおこなわれた平成 7 (1995) 年頃になると、城跡周辺の宅地開発が活発化したため、向日市教育委員会では、物集女城を文化遺産として後世に伝えるため、城館復原のための基礎資料入手を目的として、考古学的調査を実施して実態を解明することとなった。

物集女城跡が位置し、城館遺存地割地名と推定される物集女町中条では、これまでに物集女城跡の調査として 11 回、中海道遺跡の調査として 9 回の調査がおこなわれており、現在も残る東土塁、東堀、北堀のほか、南・西・北土塁を確認し、南北約 75 m、東西約 70 m の方形単郭式の城館と判明した。また堀・土塁の外側で、中世、13～16 世紀の遺構・遺物が確認されている。なおこれらの地域について、これまで慣習的に「西外郭・北外郭」と表記してきたが、堀・土塁によって区画される内郭に対しての「外郭」であり、城館の一部である印象を受けるが、物集女城が連郭式の城館であるか否かはこれまでのところ明らかとなっていない。またそもそもこれらが「郭」として堀・土塁によって囲繞されるかについても、可能性は否定できないが、確実といえる成果は確認できていない。よって「西外郭」・「北外郭」と括弧をつけて表記する。

物集女城跡に関する既往の調査について、以下に簡単にまとめておく。

〔第1次調査〕 測量調査 物集女城跡一帯の測量調査を実施。

〔第2次調査〕 東堀の調査 東堀北東隅部に 1 箇所、中央部に 2 箇所の調査区を設定し、規模を確認した。

〔第3次調査〕 東堀・北堀の調査 東堀北東隅部に 1 箇所、南部に 1 箇所、北堀中央部に 1 箇所の調査区を設定する。土塁および堀北東隅部の「隅切り」形態が自然地形の影響を受けたものと判明した。

〔第4次調査〕 東土塁の調査 東土塁の位置、規模、構造、構築年代を確認。土塁が、「叩き土塁」とよばれる手法で構築されたことが判明した。また土塁基底部から 15 世紀後半代の土師器・皿が出土し、土塁の構築年代を考える資料を得た。

〔第5次調査〕 南・西土塁隅部の調査 土塁南西隅部を検出し、物集女城が南北約 75 m、東西約 70 m の方形単郭式の城館であることが確定した。

〔第6次調査〕 南土塁の調査 南土塁の位置、規模、構造および時期を確認した。また土塁下層から 14～15 世紀代の遺構を確認した。

表-3 物集女城跡調査一覧

調査 回数	中海道遺跡 の調査回数	調査地点	期間	概要	費用負担	文献
第1次	-	測量調査	昭和56(1981)年 9月~10月	物集女城跡一帯の測量調査を実施。	市費	文献1
第2次	36次	東堀	平成7(1995)年 10月~12月	東堀北東隅部に1箇所、中央部に2 箇所の調査区を設定。 東堀の規模を確認。	市費	文献 2・3
第3次	44次	東堀・北堀	平成8(1996)年 11月~12月	東堀北東隅部に1箇所、南部に1箇 所、北堀中央部に1箇所の調査区を 設定。 土塁および堀北東隅部の「隅切り」 形態が自然地形の影響を受けたも のと判明。	市費	文献 2・3
第4次	47次	東土塁	平成9(1997)年 10月~11月	東土塁の位置、規模、構造、構築年 代を確認。	国庫補助	文献4
第5次	48次	南・西土塁 隅部	平成10(1998)年 5月~6月	土塁南西隅部を検出し、物集女城が 南北約75m、東西約70mの方形単郭 式の城館であることが確定。	国庫補助	文献5
第6次	55次	南土塁	平成12(2000)年 11月~12月	南土塁の位置、規模、構造および時 期を確認。 土塁下層から14~15世紀代の遺構を 確認。	国庫補助	文献6
第7次	59次	「西外郭」	平成14(2002)年 2月~3月	16世紀中頃の柱穴群を確認。 西堀の西肩は確認できなかった。	国庫補助	文献7
第8次	60次	「西外郭」	平成14(2002)年 8月~9月	16世紀前半~中葉下限の建物群を 確認。	原因者 負担	文献8
第9次	61次	「西外郭」	平成14(2002)年 9月~11月	北西隅での調査。物集女城に関連 する溝、柵を確認。	国庫補助	文献9
第10次	72次	内郭東部	平成28(2016)年 11月~平成29 (2017年)1月	初めて主郭内を調査し、城館に関 わる遺構・遺物が良好に遺存して いることが判明。	国庫補助	文献10
第11次	74次	内郭北東部 ・北土塁	平成30(2018)年 1月~3月	北土塁の位置、規模、構造を確認。 北東隅部で、櫓などの基礎と思われ る高まりを確認。	国庫補助	文献11

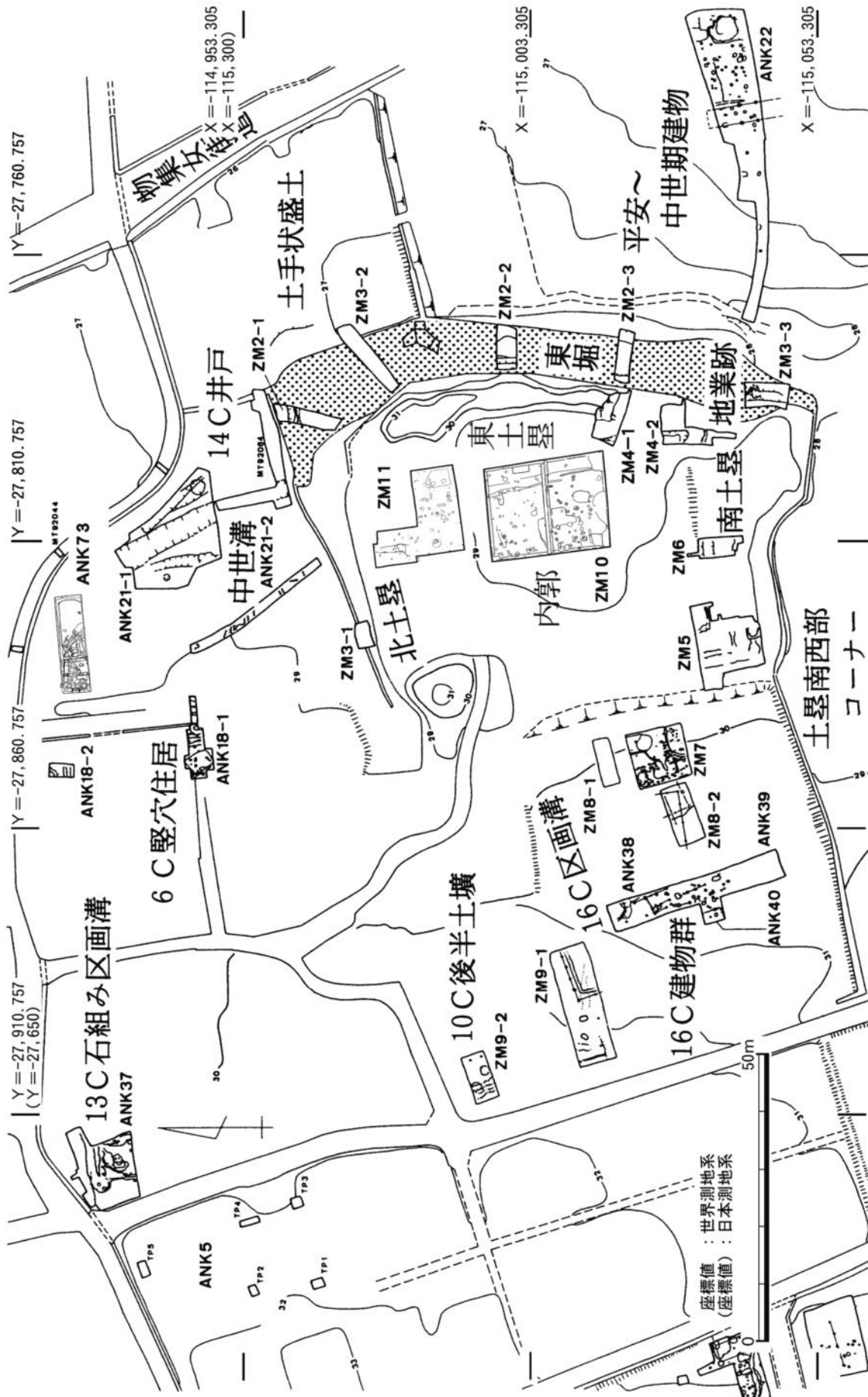
〔第7次調査〕 「西外郭」の調査 西堀の西肩を確認することを調査の主目的としたが、確認できな
かった。16世紀中頃の柱穴群を確認。

〔第8次調査〕 「西外郭」の調査 16世紀前半~中葉下限の建物群を確認。礎石建物は堀・土塁など
主郭の施設の方位とほぼ同じと判明した。

〔第9次調査〕 「西外郭」の調査 北西隅での調査。物集女城に関連する溝、柵を確認。

〔第10次調査〕 内郭東部の調査 初めて主郭内を調査し、城館に関わる遺構・遺物が良好に遺存し
ていることが判明した。また城館の存続時期である15~16世紀代の遺構を多数確認
し、主郭内の構造を明らかにする手がかりを得た。

〔第11次調査〕 内郭北東部・北土塁 多数のピットを確認し、内郭北東部は北土塁の付近まで何
らかの建物が建造される居住域として用いられた可能性が考えられる。また、北土塁
が土中に遺存しており、その位置、規模、構造を確認した。くわえて、北東隅部で、



第28図 周辺調査地配置図

表-4 中海道遺跡調査一覧 (物集女町中条実施分)

調査 次数	調査地点	期間	概要	費用負担	文献
第5次	北西部	昭和57 (1982) 年	縄文時代中～後期の土器を確認。	(京都大学)	文献12
第18次	「北外郭」	平成元 (1989) 年 12月	13世紀前半の溝、土坑を確認。	原因者負担	文献13
第21次	「北外郭」	平成4 (1992) 年 6月～7月	14世紀代の石組み井戸、中世～近世の溝を確認。	原因者負担	文献14
第22次	東部	平成4 (1992) 年 8月～10月	平安時代の掘立柱建物、中世の土坑を確認。	原因者負担	文献15
第37次	北西部	平成8 (1996) 年 4月	13世紀代の石組み溝を確認。	国庫補助	文献16
第38次	「西外郭」	平成8 (1996) 年 4月～5月	16世紀前葉の大形溝、柵、土坑、16世紀中葉の耕作関連溝を確認。	国庫補助	文献17
第39次	「西外郭」	平成8 (1996) 年 4月～5月	16世紀前葉には居住域として土地利用されていたと推定。	国庫補助	文献17
第40次	「西外郭」	平成9 (1997) 年 1月		市費	文献18
第73次	「北外郭」	平成29 (2017) 年 2月～3月	中世の土塁状施設の基礎遺構を確認。	原因者負担	文献19

北東土塁の内側で堅く締まった高まりを確認した。櫓などの基礎と思われる平坦面が構築されていたと思われる。

次節では、これまで確認された遺構について、各報告書の内容を再構成して詳述する。以下、複数のトレンチを設けた調査は第○-1～3トレンチ、トレンチ箇所調査は第○次調査と表記する。

2 遺構 (第 28～44 図 巻頭図版第 2～8 図版第 1～30)

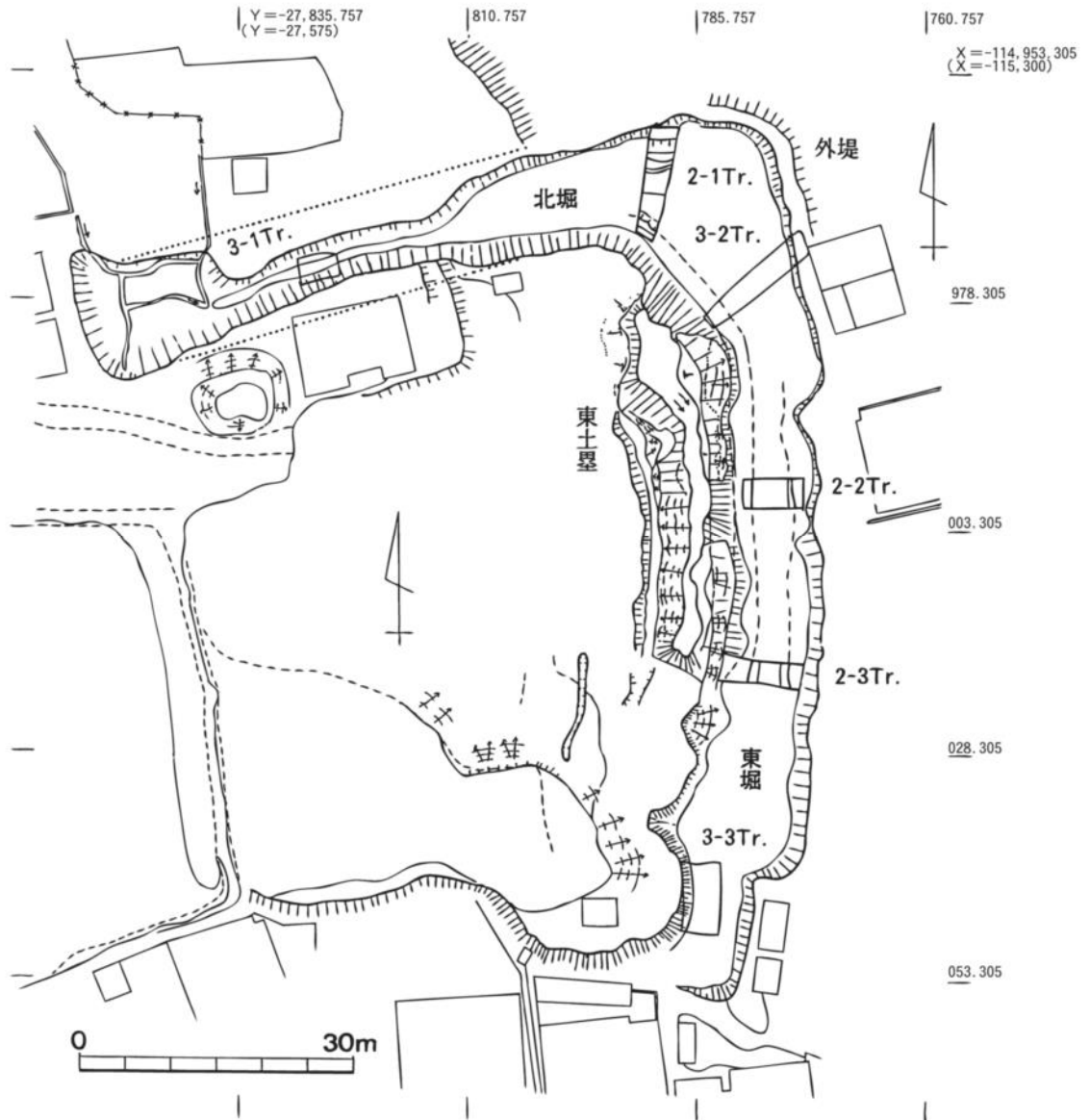
[1] 堀 (第 29～31 図)

東堀で3箇所 (2-2・2-3・3-3トレンチ)、東堀-北堀接合部で2箇所 (2-1・3-2トレンチ)、北堀で1箇所 (3-1トレンチ) の調査がおこなわれている。また第5次調査で西堀の一部を確認している。基本層序は、第1層:近世～現代の遺物を包含する現成堆積物、第2層:堀内部埋土・城館関連構築土、第3層:基盤層の扇状地性堆積物である。第2・3次調査における基本層序を対比すると、第1層:第2次調査1・2層=第3次調査第1層、第2層:第2次調査第3層=第3次調査2・3層、第3層:第2次調査第4層=第3次調査第4層である。

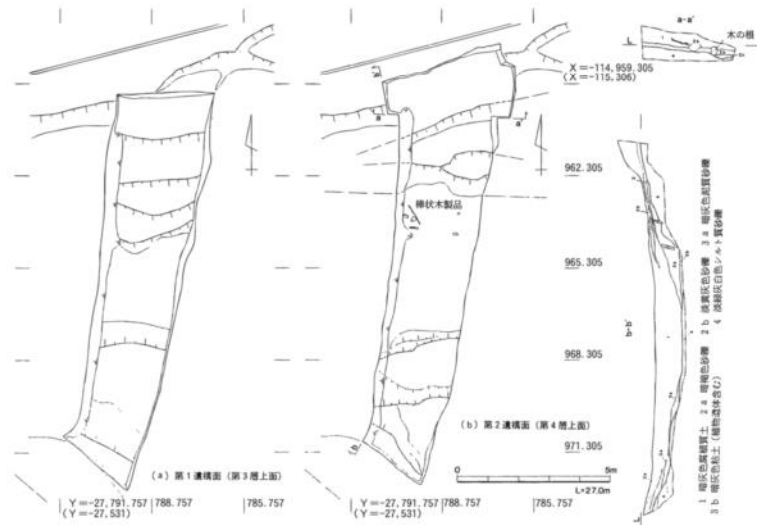
(1) 東堀 (第 29・30 図)

東堀南部に位置する第2-3トレンチは、西は土塁基部、東は外堤部まで広く確認した調査である。最底部の断面形は箱掘り状で、規模は幅 4.3 m である。土塁側の西肩は下端から約 40° の角度で急激に立ち上がる。東肩は基本層序第2層系の暗灰色シルト質砂を積み上げた外堤部を確認した。堀上面の幅は、外堤部上端で 11.0 m、第3層上面で 9.8 m である。標高は、西肩上端 26.8 m、東肩外堤部上端 27.5 m、中央部底面 25.15 m で、肩からの深さは、1.65 m～2.35 m である。

東堀中央部に位置する第2-2トレンチでは、基本層序第2層が、中央部のみ堆積が浅い状況を確認した。近現代の浚渫によって中央部の堆積が失われたと思われる。第2層を除去して堀底および東西の

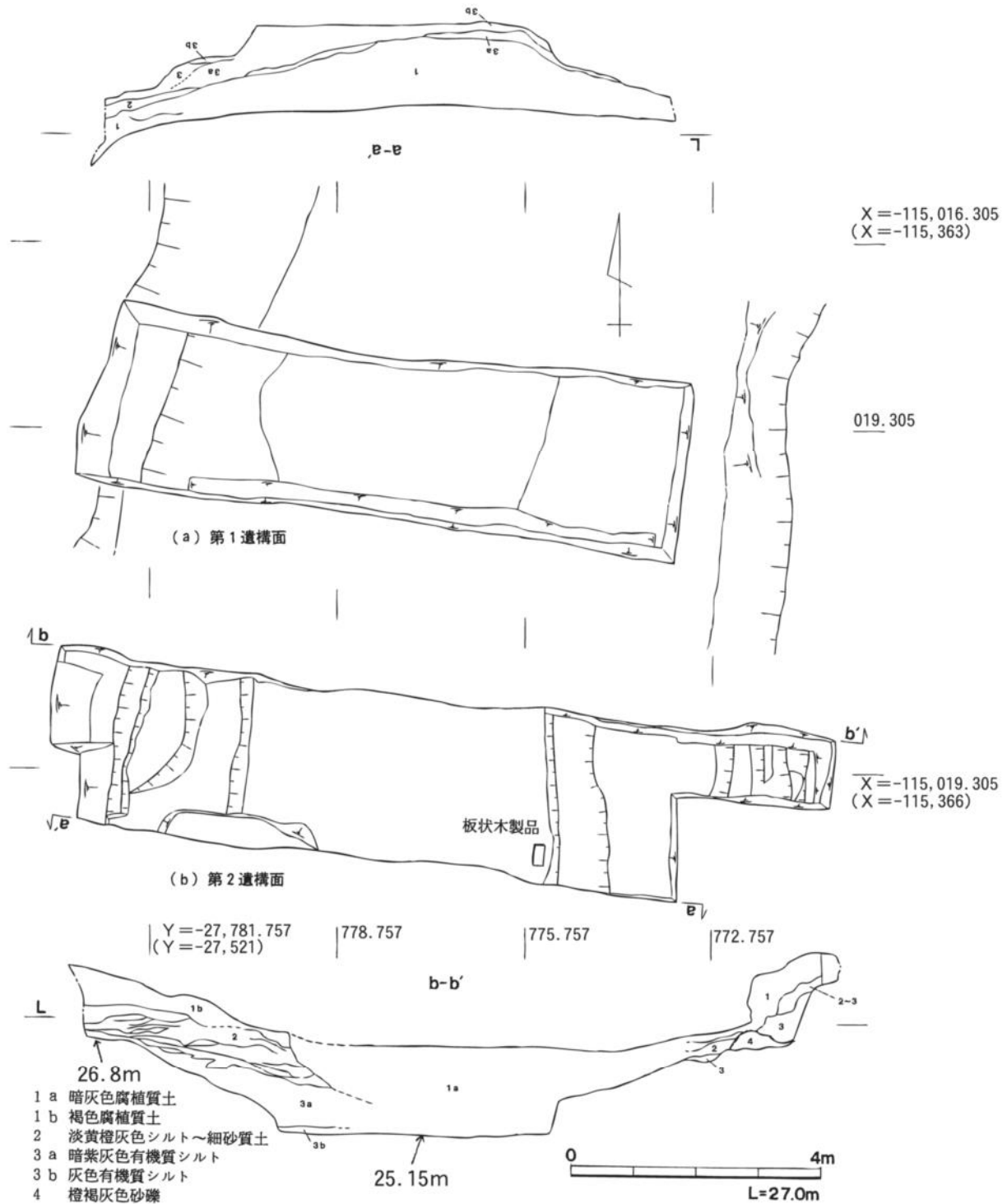


(a) 第2・3次調査トレンチ配置図



(b) 第2-1トレンチ実測図

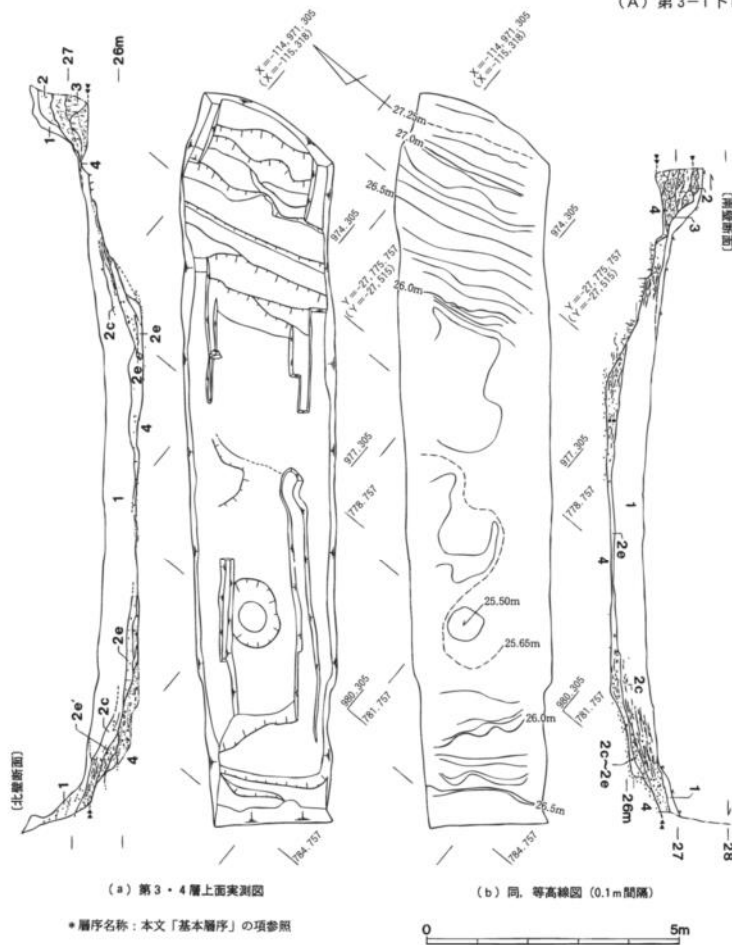
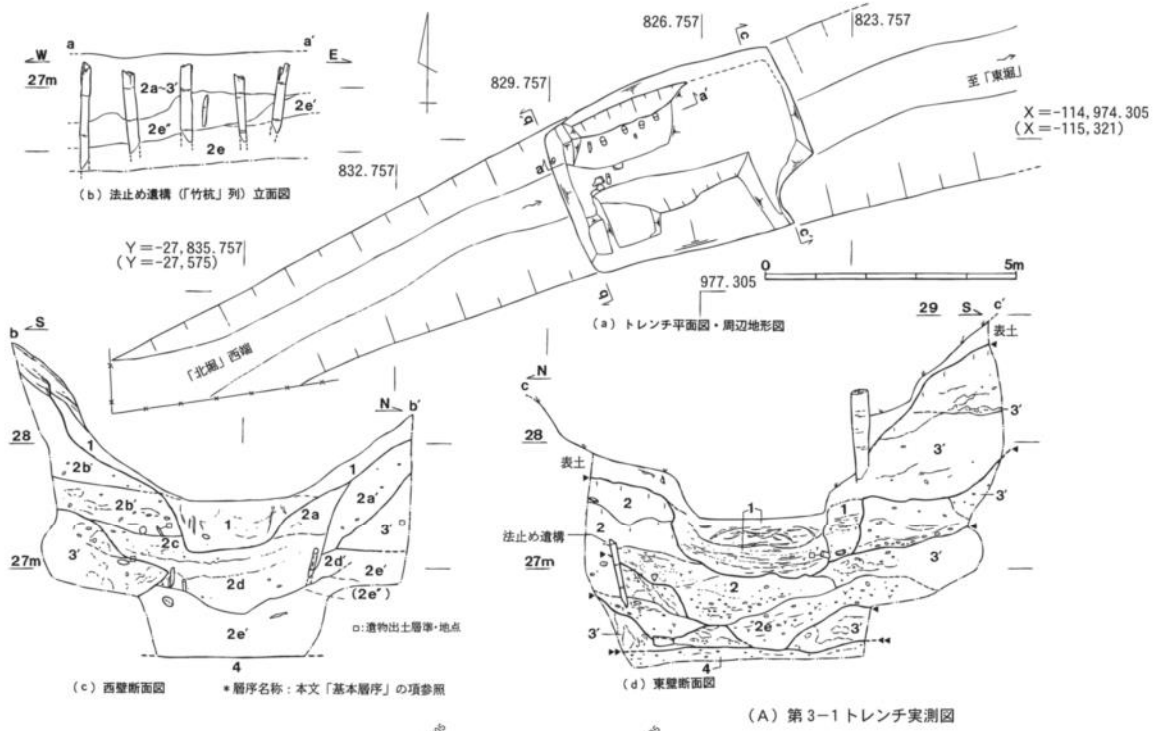
第29図 堀-1 (トレンチ配置図・第2-1トレンチ実測図)



第 30 図 堀-2 (第 2-3 トレンチ実測図)

肩を検出した。肩の方位はともに南北方向である。西肩は土塁側にむかってテラス状になる。東肩は階段状に立ち上がる。堀底は平坦で、幅は 4.9 m である。上面の幅は、東側上段で 7.7 m、中段上段で 6.6 m である。標高は、西肩テラス部 26.5 m 前後、東肩最上面 26.8 m、中央部底面 25.7 m である。

東堀南端に位置する第 3-3 トレンチでは、東落ち斜面を構成する地業痕跡を確認した。下端に沿って断面凸形の盛土を配置して、その上位に盛土し斜面を形成する。またトレンチ北端では盛土内に



第31図 堀-3 (第3-1・2トレンチ実測図)

径 0.2 ~ 0.6 m の巨礫群がともなっている様子を確認した。内郭南東隅部には、現況で東西約 20 m、南北約 15 m の南に広がる平坦地がある。これを「張り出し部」と呼称しており、「虎口」(出入り口)あるいは「横矢がかり」(防御・攻撃用施設)と解釈されていた。第 3 - 3 トレンチはこの「張り出し部」の東に位置し、確認された地業痕跡は「張り出し部」東斜面の崩壊を防ぐ土留め工と評価された。なお「張り出し部」について、第 4 次調査で限定的な範囲の調査ではあるが、近世の遺物が出土しており、その存否が疑問視されていた。最近、周辺住民により「張り出し部」は土塁を破壊した土で整地したことが判明した^(註 1)。よって物集女城存続期に「張り出し部」は存在しなかったと判断する。

(2) 東堀 - 北堀接合部 (第 29・30 図)

東堀 - 北堀接合部北西に位置する第 2 - 1 トレンチでは、北肩 1 段、南肩 2 段の堀を検出した。北肩はトレンチ北端から 3.0 m まで平坦で (外堤部)、これから急傾斜して底へむかう。南肩は、見かけ上の上端が北西 - 南東方向に走行する。急傾斜して第 1 段平坦面へむかう。平坦面の幅は 1.5 ~ 4.0 m で第 2 段の肩から底へむかう。上面の幅は約 9.5 ~ 12.0 m である。標高は、北肩上端 26.18 ~ 26.25 m、下端 25.65 m、南肩上端 26.48 ~ 26.61 m、下端 25.7 m 前後、中央部底面 25.68 m で、肩から底までの深さは 0.57 ~ 0.93 m である。

東堀 - 北堀接合部南東に位置する第 3 - 2 トレンチでは、南西肩および法面が、土塁と同じく北西 - 南東方向に延びる様子を確認した。この接合部の隅切形態について、報告書では「遺跡の地形条件 (東もしくは北東に傾斜する扇状地面) にあわせて、傾斜側を切り落とすような合理的施工 (法切り工) の結果」であると指摘する。堀の内・外ともに傾斜は緩やかで、底は平坦である。堀の幅は、上面で 10.6 ~ 11.2 m、底面で 6.5 ~ 7.0 m である。第 2 層から 16 世紀中葉 ~ 後半の遺物が出土した。標高は、南西肩上端 26.7 m、北東肩上端 26.7 m、中央部底面 25.6 m、肩から底までの深さは 0.9 m である。

(3) 北堀 (第 31 図)

北堀中央部に位置する第 3 - 1 トレンチでは、基盤層である基本層序第 3 層の上位に、第 1 層が厚さ 2.0 ~ 2.6 m 堆積しており、堀南北の肩を確認することができなかった。現状での堀底面の幅は約 1.0 m で、報告書では、「南・北からの継続的な客土が堀の幅を徐々に狭め、現在の小規模なものとした」と推測する。なお北堀北半部と西方の凹地の形態的連続性から、北堀の幅を約 11 m に復原した (第 31 図 (A))。

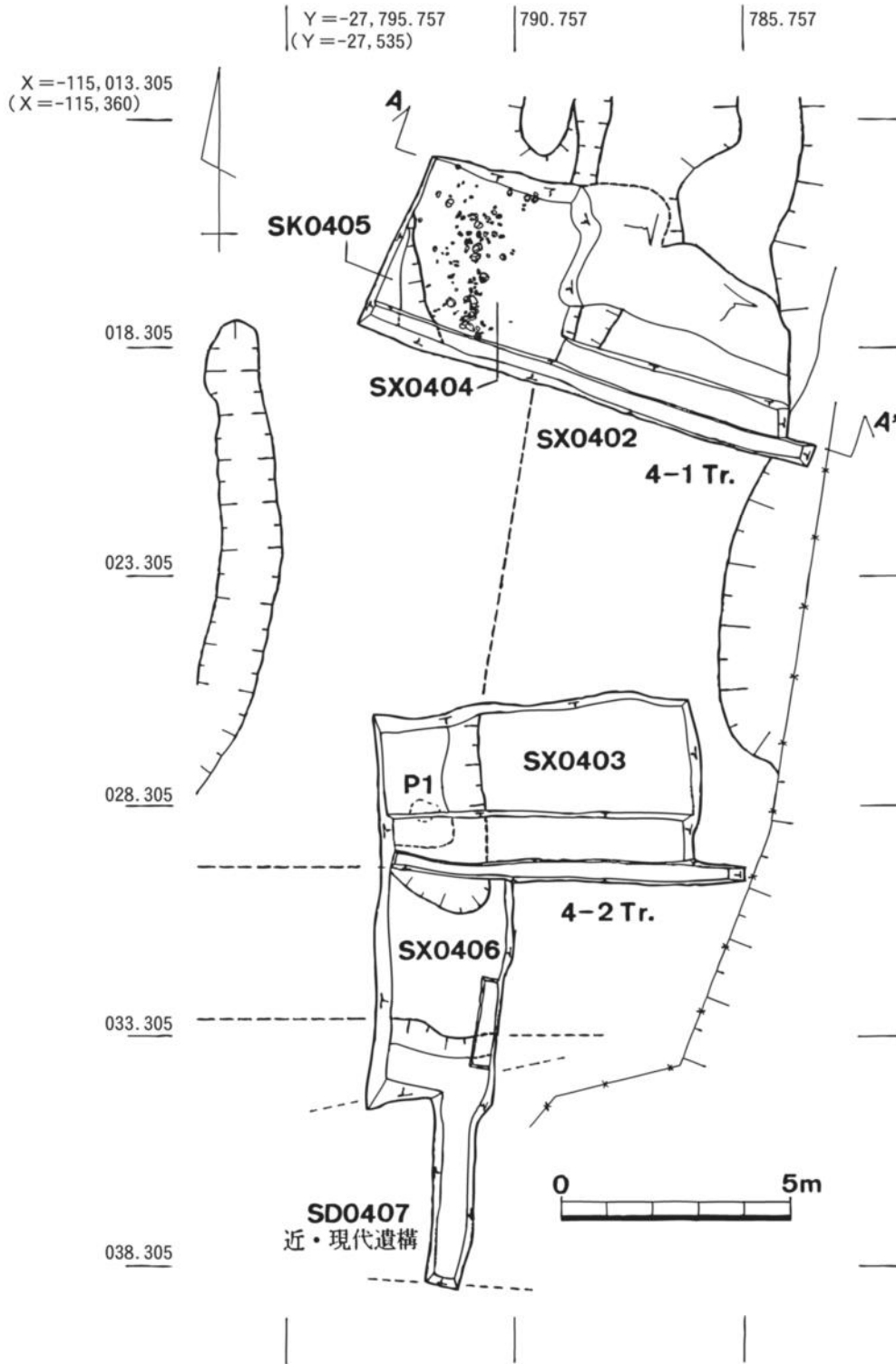
[2] 土塁 (第 32 ~ 37 図)

東土塁 (第 4 - 1・2 トレンチ)、東南隅部 (第 4 - 2 トレンチ)、南土塁 (第 6 次調査)、南西隅部 (第 5 次調査)、北土塁 (第 11 次調査)、北東土塁 (第 11 次調査) の調査がおこなわれている。

基本層序は、第 1 層：表土・盛土、第 2 層：土塁崩落土・堀埋土、第 3 層：土塁構築土、第 4 層：土塁基底の整地層、第 5 層：内郭遺構面 (中世以前の包含層)、第 6 層：基盤層の扇状地性堆積物である。

(1) 東土塁 (第 32・33 図)

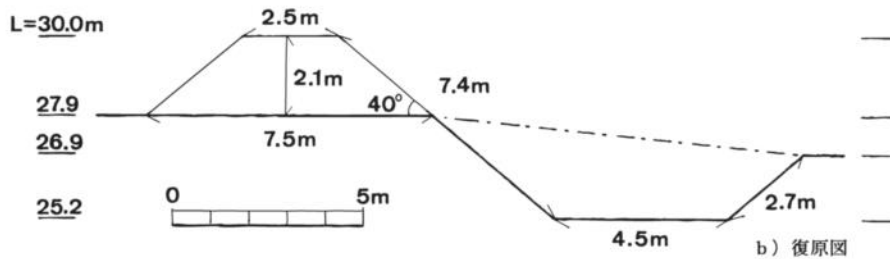
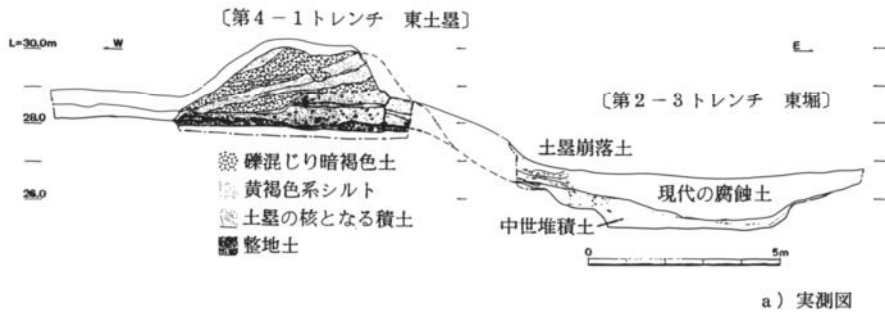
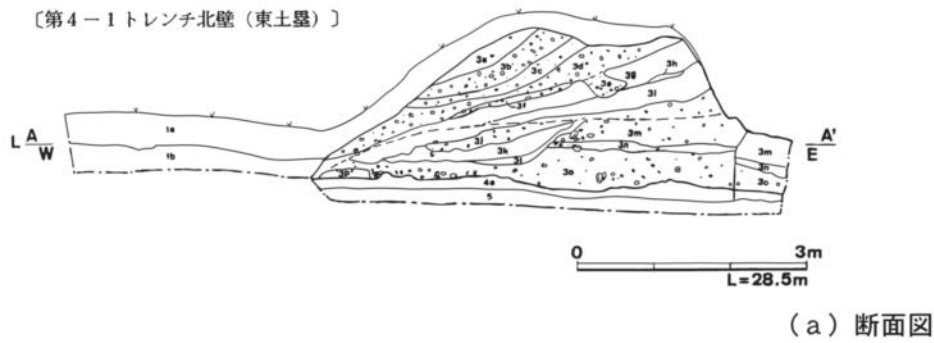
第 4 - 1 トレンチでは、現存する東土塁の測量および断割調査をおこなった。現況の東土塁の規模は、基底幅 6.0 m 以上、上端幅約 2.0 m、高さ約 2.0 m である。断面観察によって「叩き土塁」とよばれる手法で構築されたことが確認できた。まず基底部を第 4 層で整地したのち、堀側に水平に叩き締めながら積んで高まりをつくり、土塁の核とする。規模は幅 3.5 m 以上、高さ約 1.0 m である。この高まりを利用して内郭へ傾斜する形でさらに土を積み上げて土塁を構築する。用いられる土は礫混じり暗褐色土と



第 32 図 土塁一 (第 4 次調査平面図)

黄褐色系の粘質土の互層である。第 4 層から 15 世紀後半～16 世紀前半の土師器・皿 (第 48 図-163) が出土しており、土塁の構築年代の一定点を示す。

土塁南東隅部に位置する第 4-2 トレンチでは、土塁下部を検出した。規模は、基底部幅 6.0 m 以上、残存高 0.8 m である。礫混じり暗褐色土と黄褐色系の粘質土の互層を用いる点、内郭へ傾斜する形でさらに土を積む点など構築法は第 4-1 トレンチと同じであるが、互層の単位は細かい点がことなる。報



(b) 東土塁・東堀の位置関係図・概念図

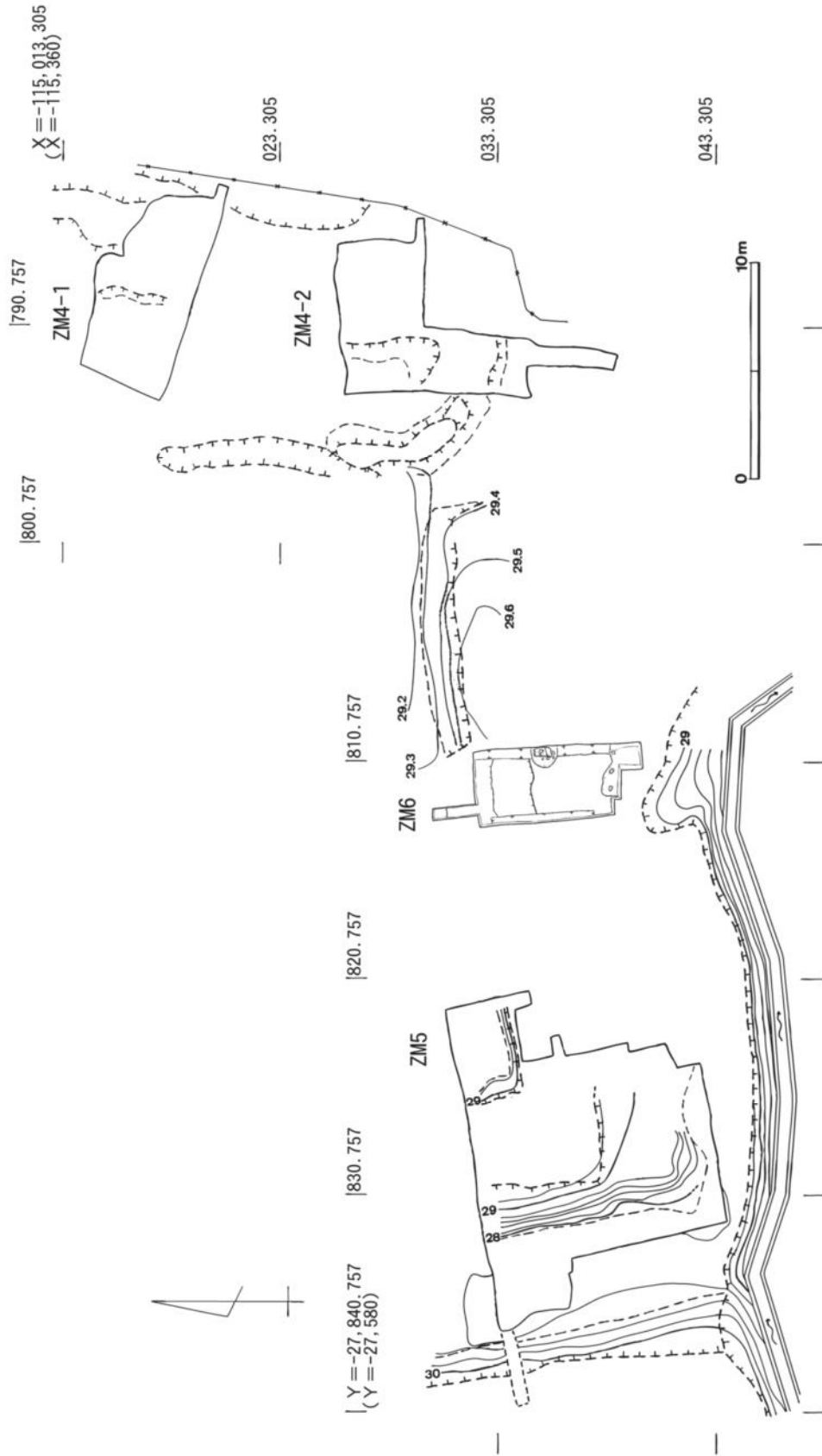
第 33 図 土塁-2 (東土塁断面図・土塁-堀断面模式図)

告書では平面的な作業単位の違いによるものと指摘する。

また報告書では、東土塁 (第 4-1 トレンチ)、東堀 (第 2-3 トレンチ)、郭外東側中世遺構面 (中海道遺跡第 22 次調査) の標高値を用いて、土塁・堀の規模を復原した概念図を作成した (第 33 図 (b))。これによると、土塁の規模は基底幅 7.5 m、上端面幅 2.5 m、高さ 2.1 m で、堀底から土塁上端までの高さは 4.8 m となる。また断面積では、土塁が約 10.5 m^2 、堀が約 15.17 m^2 で、堀の掘削による土量が土塁の規模を大きく超えることを指摘する。

(2) 南土塁 (第 32・34・35 図)

南土塁は、現況では上部が破壊され、周辺と同じ高さまで削り取られている。中央部に位置する第 6 次調査では、土塁下部を確認した。南側は防空壕によって破壊されていた。残存する規模は、基底部で幅 6.5 m 以上、高さ 0.55 m である。土塁構築土は 2 段階の造成単位が確認できた。南半に分布する第 3



第34図 土壘一3 (南土壘調査区配置図)

b 層は、南北方向は水平、東西方向は西から東に傾斜して堆積する様子を確認した。一方北半に分布する第 3 a 層は、南から北に向けて傾斜して堆積する様子を確認した。東土塁の成果と比較すると、第 3 b 層が核、第 3 a 層が傾斜して積み上げた層に対比できる。ただし、第 4 層は確認できなかった。層中から 15 世紀末～16 世紀前半代の土師器・皿が出土した。

土塁南東隅部に位置する第 4 - 2 トレンチでは、東土塁との関係が確認できた。残存する規模は、基底幅約 5.0 m、高さ 0.6 m である。東土塁とことなり、土塁構築土はほぼ水平に積まれており、礫混じり土と粘質土の使い分けも認められない。また東土塁の上に南土塁の構築土が乗っており、東土塁構築後に南土塁がつくられたことが確認できた。

土塁南西隅部に位置する第 5 次調査では、土塁北端（内郭）側の一部を確認した。幅 1.80 m、残存高 0.55 m である。土塁構築土は他と違い粘性に富んでおり、黄色系の粘質土ブロックを多量に含み、また一部に火山ガラスを含んでいた。第 6 層：基盤層の扇状地性堆積物の下位に堆積する段丘・下位面構成層を積み上げたものと考えられる。また第 6 次調査と同じく、第 3 層は確認できなかった。なお基底幅については、南西隅部の検出状況から、約 7.0 m に復原できる。

(3) 西土塁 (第 35 図)

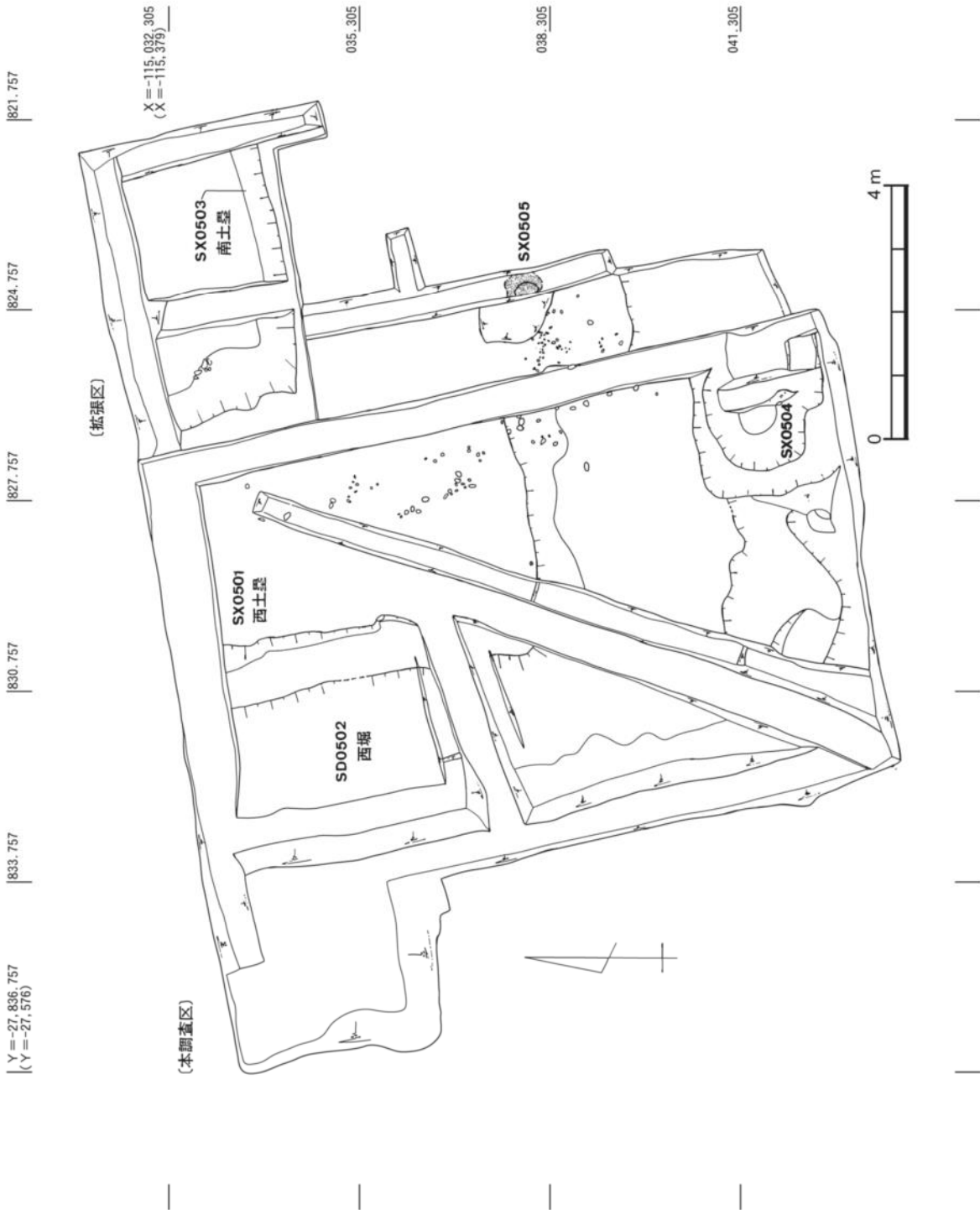
西土塁も南土塁と同じく、現況では上部が破壊され、周辺と同じ高さまで削り取られている。土塁南西隅部に位置する第 5 次調査では、土塁下部を確認した。基底幅約 5.1 m、残存高 0.7 m である。第 3 層で整地したのち、暗褐色系土を用いて西堀側で山または堤状をなし、土塁の核となる層を積み上げる。規模は、幅約 2.0 m、高さ約 0.35 m である。その後、黄色系土と暗褐色礫混じり土の互層を、内郭側に傾斜して堆積するよう積み上げる。これらの層はさらに分層が可能で、細かい単位で土を積み上げたことが確認できた。以上の構築法は東土塁と類似しており、「叩き技法」とよばれる工法に相当する。

(4) 北土塁 (第 36 図)

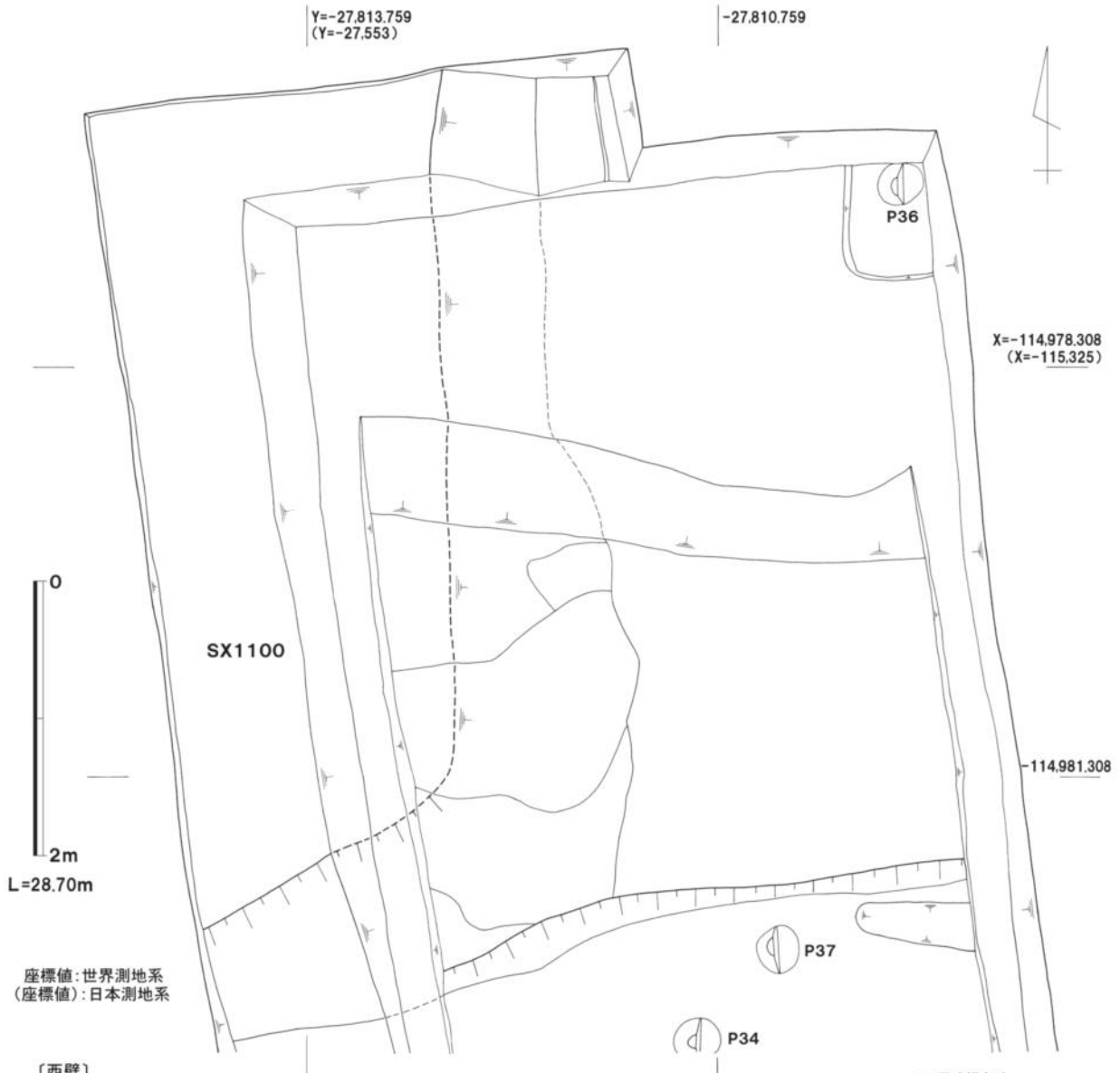
土塁北東部に位置する第 11 次調査では、土塁の下半、約 1 / 2 が埋没した状態で確認した。残存する規模は基底幅約 6.0 m 以上、高さ 1.2 m である。第 1 トレンチ北端から北堀までの距離は約 2.0 m であるので、推定される北土塁の規模は、基底幅約 8.0 m で、第 4 次調査で確認された東土塁の規模（基底幅 7.5 m）と遜色ない大きさであることが判明した。土塁構築土は、第 5 層：黒灰色砂～粘質土混じり砂上に第 4 層：暗赤褐色礫混じり土、赤灰色砂～粘質土混じり砂、灰褐色粘質土混じり砂を用いて整地し、堀側から内へ傾斜するよう土を積み上げて、土塁本体を構築している。東・西土塁でみられた堀側の核は、検出範囲では確認できなかった。トレンチ北端と北堀南端の間に存在するものと思われる。積み上げられる土はあまり締まりがなく、また他の土塁にみられるような粘質土と砂礫を交互に積み上げる様子もあまりみられない特徴がある。土塁構築土中から、弥生土器、古式土師器、古墳時代須恵器、歴史時代土師器・須恵器、灰釉陶器、瓦器が出土した。また北土塁は第 1 トレンチ西端から約 1.0 m の地点で、東側が第 4 層を残し削り取られている様子を確認した。

(5) 北東土塁 (第 37 図)

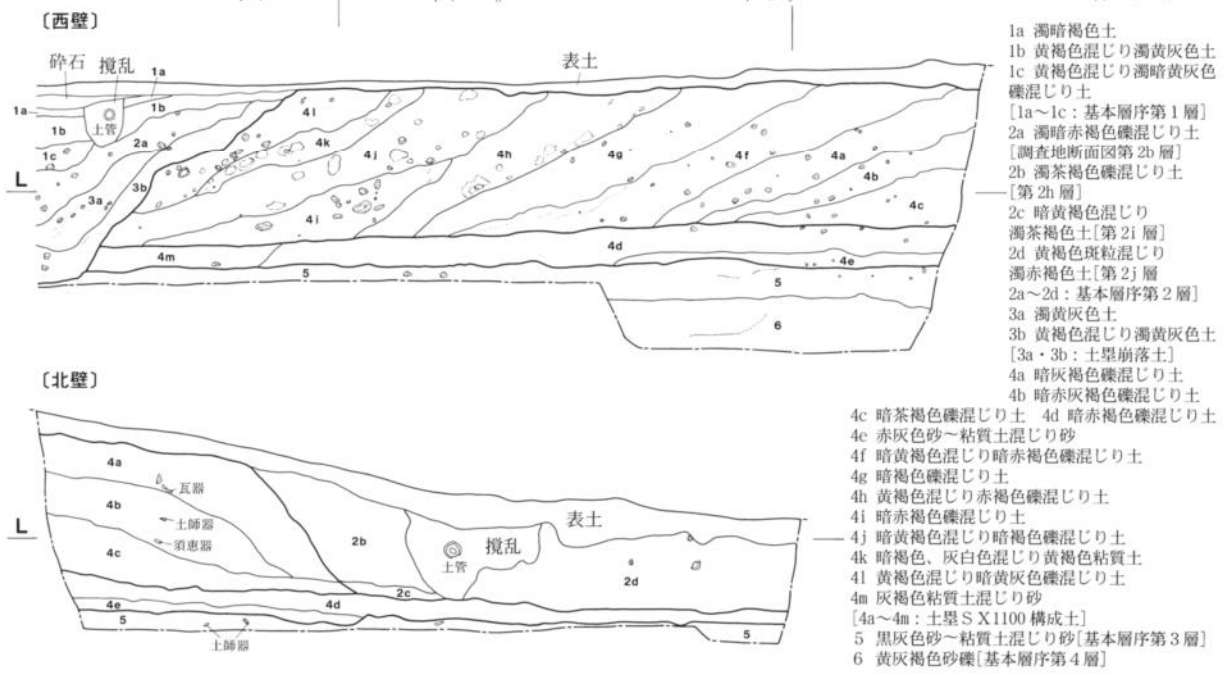
土塁北東部に位置する第 11 次調査第 2 トレンチ北東隅で、表土を除去した段階で非常に堅く締まった面を確認した。向きが「隅切り」される北東隅部土塁および堀と一致しており、北東隅部の土塁に関連する遺構として精査および断ち割り調査をおこなった。その結果、人為的に積み上げられており遺構



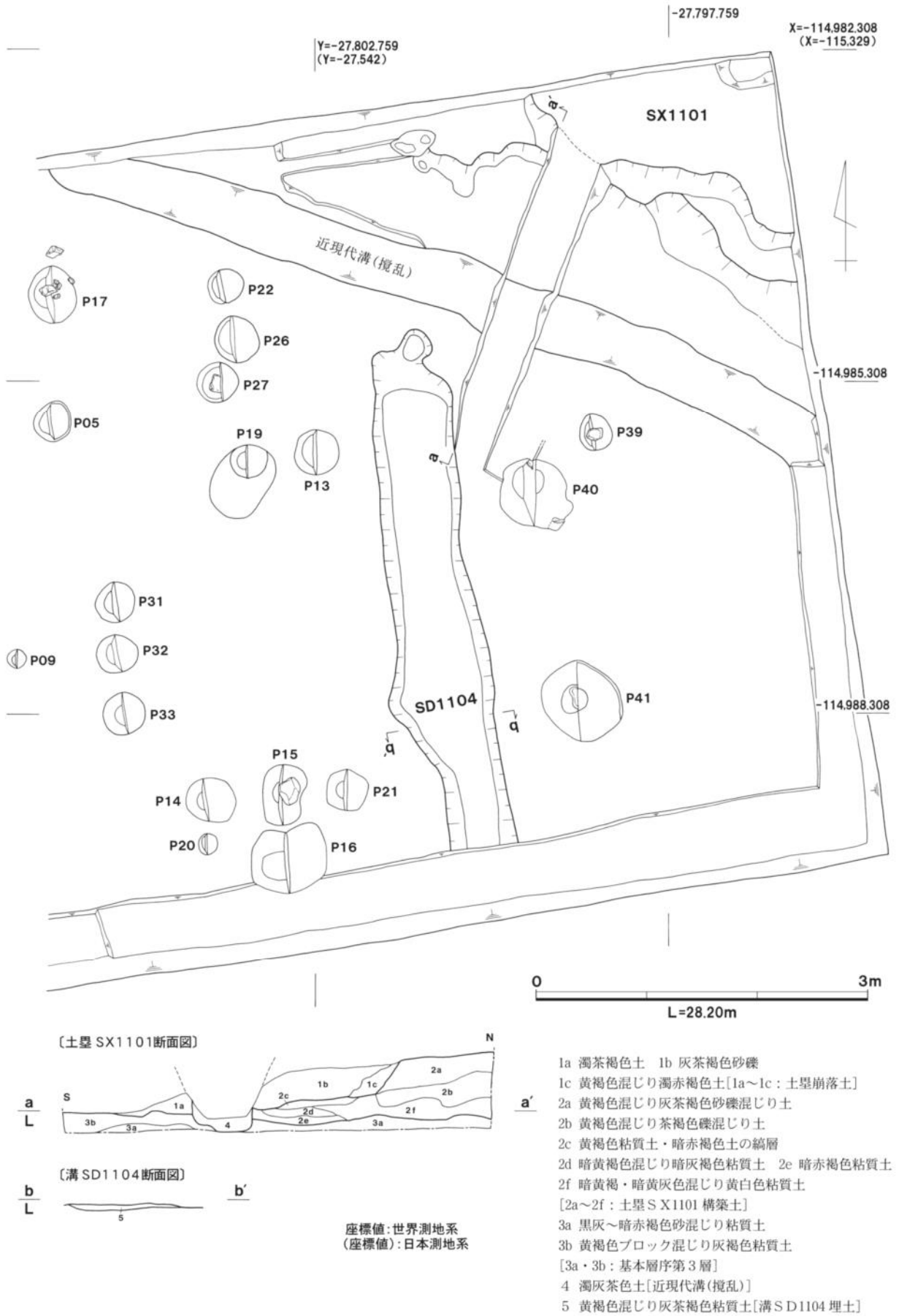
第35図 土壘一4 (第5次調査平面図)



座標値:世界測地系
(座標値):日本測地系



第 36 図 土壘 - 5 (北土壘 S X 1100 実測図)



第37図 土壘-6 (北東土壘 SX 1101 他実測図)

であることを確認した。裾部は、竹の根切り溝と思われる近現代の溝で破壊されていた。現状で確認できる規模は、東西約 4.5 m、南北約 3.0 m、残存高さ 0.7 m である。構築土は、2 a : 黄褐色混じり灰茶褐色砂礫混じり土、2 b : 黄褐色混じり茶褐色礫混じり土、2 c : 黄褐色粘質土・暗赤褐色土の縞層、2 d : 暗黄褐色混じり暗灰褐色粘質土、2 e : 暗赤褐色粘質土、2 f : 暗黄褐・暗黄灰色混じり黄白色粘質土の 6 層に細分できる。層中から、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器が出土した。第 2 c ~ 2 f 層をベース層として平坦に配置したのち、第 2 a ・ 2 b 層を積み上げるものと思われる。構築土の様子は北土塁とまったく違う特徴が認められる。また裾部から現状の堀までの距離が約 15.0 m と、東・北土塁基底幅のほぼ 2 倍の幅であることから、土塁構築土の一部とは考えにくく、土塁の内側に他より一段高い段を構築し、櫓などを設置した基礎部分と解釈した。

〔3〕内郭 (第 38 ~ 42 図)

内郭東~北東部でおこなった第 10・11 次調査では、城館存続期の遺構を多数検出した。

基本層序は、第 1 層 : 表土・耕作土、第 2 層 : 近世以降の包含層、第 3 層 : 物集女城期遺構面、第 4 層 : 基盤層の扇状地性堆積物である。第 3 層上面の検出レベルは 28.0 ~ 28.2 m である。

検出遺構は、区画施設 1 基 (区画施設 S X 1003)、土坑 7 基 (土坑 S K 1001・1002・1006・1008・1010・1011・1015)、落ち込み 3 基 (落ち込み S X 1012・1013・1016)、溝 6 条 (溝 S D 1004・1005・1007・1014・1017・1104)、ピット 133 基である。

〔区画施設 S X 1003〕 南北方向に延びる溝状の遺構である。断面形は浅い皿状で、深さは 0.1 m、埋土は褐灰色粘質土である。長さ約 13.0 m を確認した。埋土に多量の礫および遺物が充填されており、当初石組み溝あるいは暗渠溝の可能性を考えたが、面をなして並ぶ様子ではないため、土塀などの基礎構造の可能性が高いと思われる。この遺構は東土塁と並行しており、主郭内を区画する施設と思われる。土師器、須恵器の小片が出土した。

〔土坑 S K 1001〕 不整形の土坑である。規模は、東西 0.9 m、南北 2.0 m、深さ 0.3 m、埋土は上層 : 黄褐色ブロック混じり灰黄褐色粘質土、下層 : 灰茶褐色土である。埋土から施釉陶器・備前焼壺、土師器・皿および多量の礫が出土した。城内の廃棄土坑のひとつと思われる。

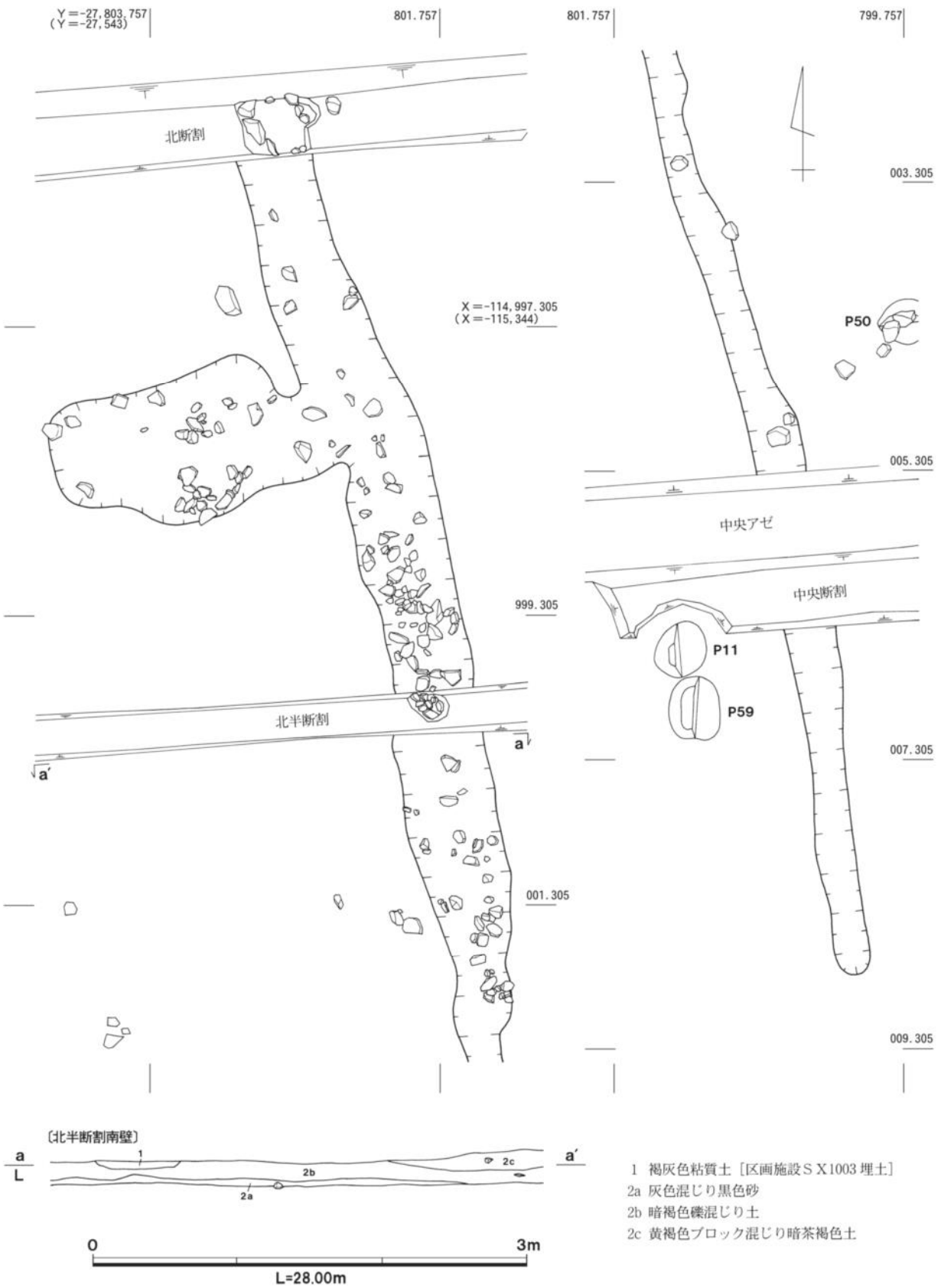
〔土坑 S K 1006〕 不整円形の大型土坑である。東および南は調査区外に広がる。溝 S D 1004・05 と重複し、これより古い遺構である。規模は東西 3.6 m 以上、南北 2.5 m 以上、深さ 0.7 m である。2 段落ちの断面形である。埋土は、大きく上層 (第 1 ~ 6・16 層) と下層 (第 7 ~ 15・17 ~ 27 層) に分けることができる。下層は第 24 層を中心に多量の土器類、特に土師器皿がまとまって出土した。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。土器類の廃棄とともに下層埋土が堆積し、最終的に上層埋土で埋め戻され整地されたと思われる。中世の土師器、白磁、施釉陶器、瓦質土器のほか、弥生土器、古式土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器が出土した。なお第 4 - 1 トレンチで検出した土坑 S K 0405 は、位置関係から土坑 S K 1006 と同一の遺構と思われる。

〔土坑 S K 1010〕 調査区南東部で確認した、隅丸長方形の土坑である。東西 2.0 m、南北 2.8 m、深さ 0.2 m である。埋土は暗褐色礫混じり土である。拳大の礫とともに中世の土師器、白磁、青磁、陶器のほか、古式土師器、須恵器が出土した。

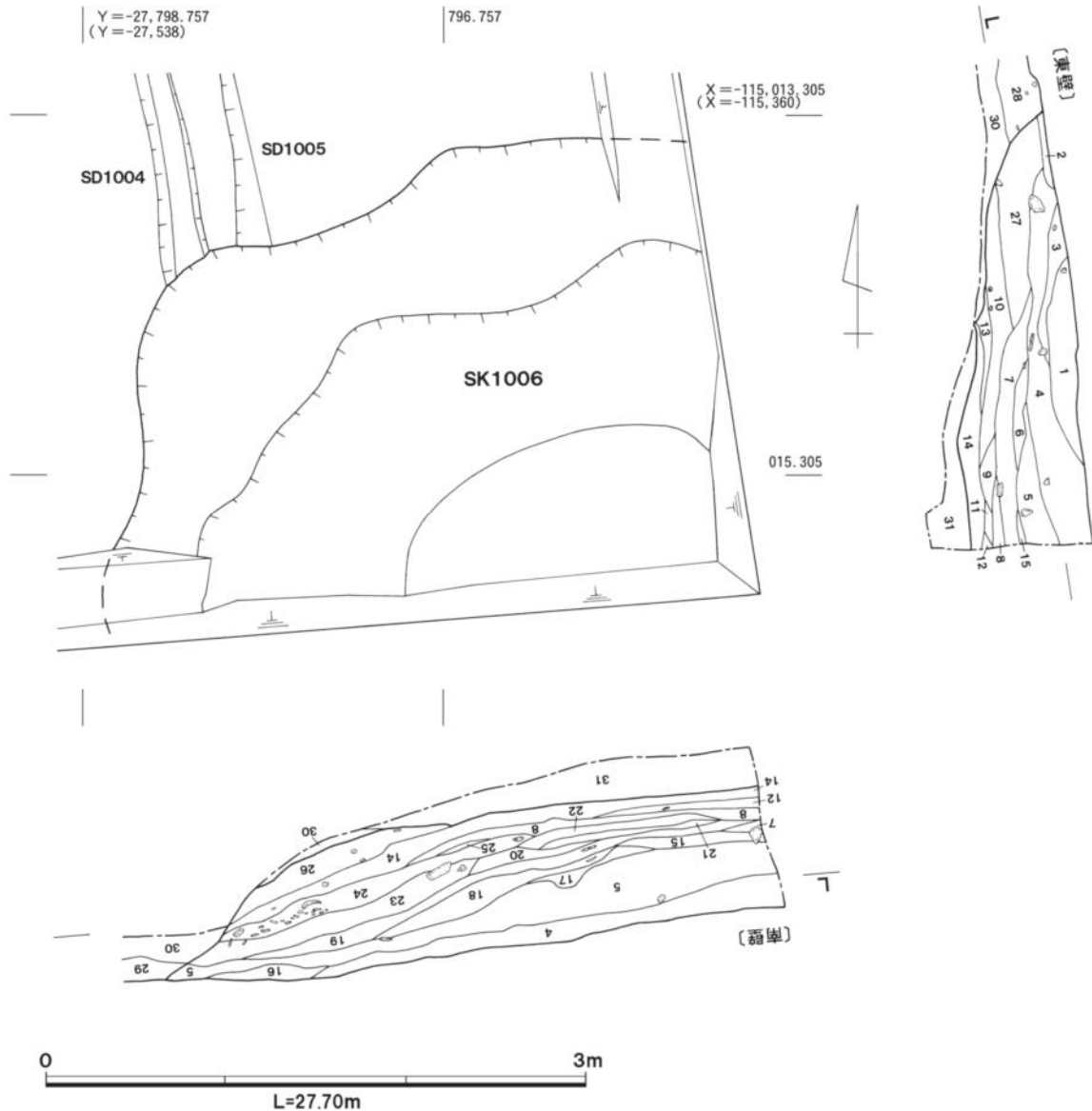
〔土坑 S K 1011〕 調査区南部中央で確認した、不整円形の大型土坑である。南は調査区外に広がる。



第38図 内郭-1 (東半平面図)



第 39 図 内郭-2 (区画施設 S X 1003 実測図)

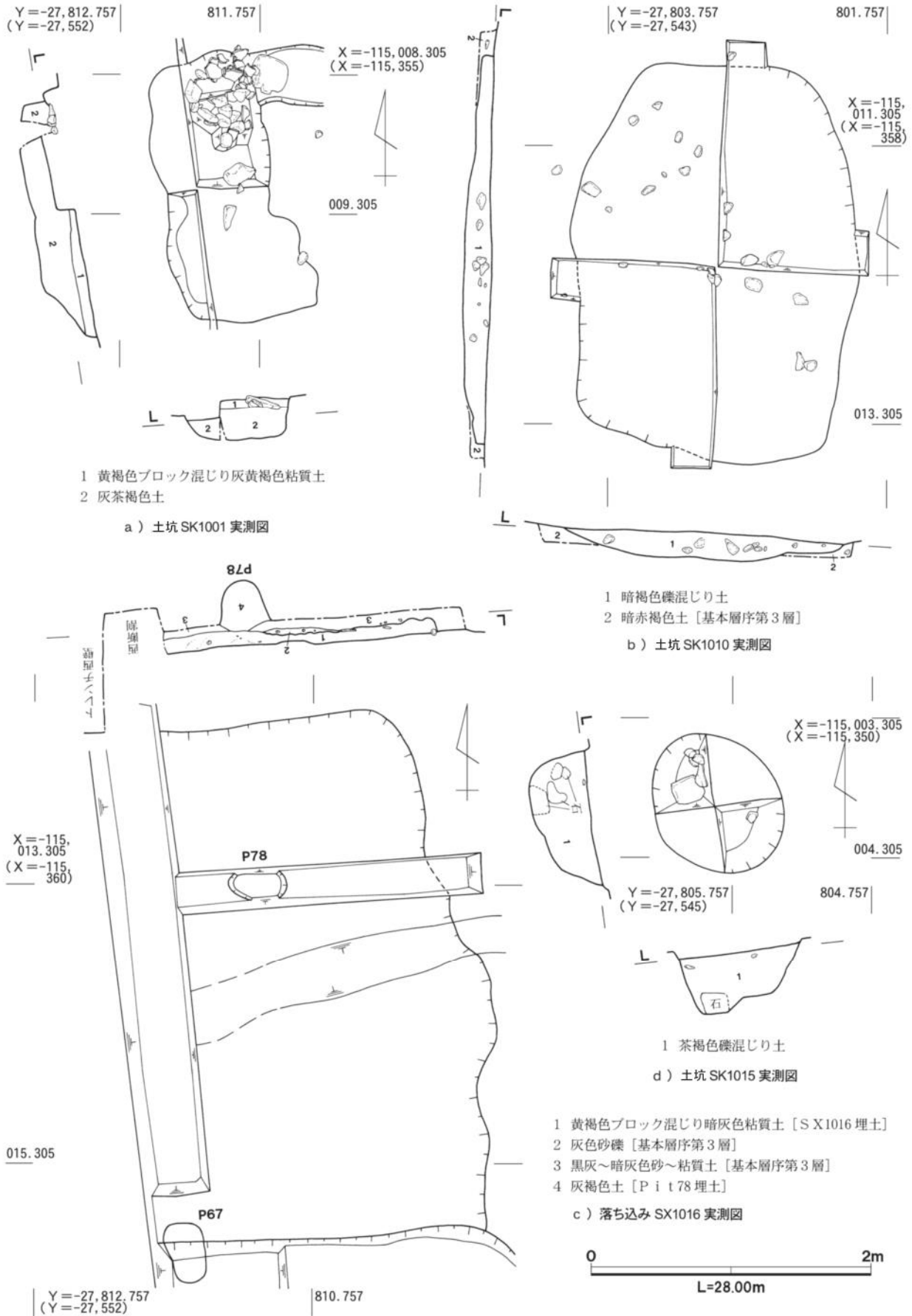


- 1 暗灰褐色礫混じり土 2 暗褐色土 3 黄褐色ブロック混じり灰茶褐色土 4 灰茶褐色礫混じり土 5 灰黄褐色混じり黄褐色粘質土
 6 暗灰黄褐色粘質土 7 黄褐色混じり暗灰黄褐色粘質土 8 暗灰色粘質土 9 灰黄色粘質土 10 灰褐色粘質土 11 暗灰色粘質土
 12 褐色砂 13 黄褐色混じり茶褐色砂混じり粘質土 14 暗灰褐色粘質土 15 明灰褐色粘質土 16 赤褐色土 17 暗灰茶色粘質土
 18 黄褐色ブロック混じり暗褐色土 19 黄灰褐色粘質土 20 黄褐色混じり灰黄褐色土 21 灰褐色粘質土 22 黄褐色混じり灰黄色粘質土
 23 暗灰茶褐色礫混じり土 24 灰黄褐色粘質土 25 灰色粘質土 26 茶褐色礫混じり土 27 暗灰褐色礫混じり土
 28 暗灰黄褐～黄灰褐色砂～粘質土 [基本層序第3層] 29 暗褐色砂 [基本層序第3層] 30 暗褐色土混じり黑色砂 [基本層序第3層]
 31 灰褐色砂礫 [基本層序第3層]

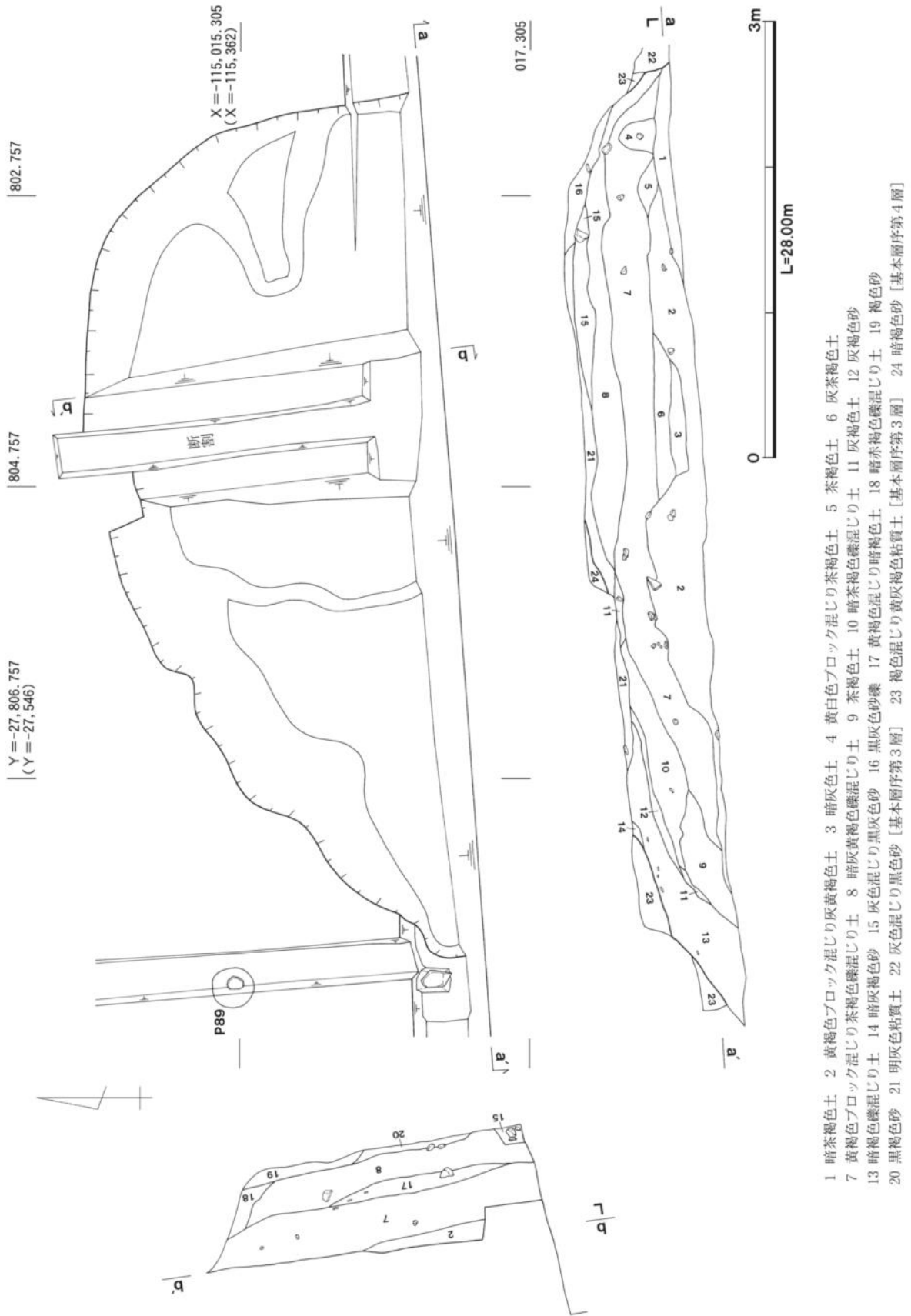
第40図 内郭-3 (土坑SK1006実測図)

規模は東西6.0m以上、南北2.5m以上、深さ0.8mである。埋土は、大きく上層(第1・2層)と下層(第3～21層)に分けることができる。下層の第7・8層を中心に多量の土器類が出土した。土坑SK1006と同じく廃棄土坑と考えられる。土器類の廃棄とともに下層埋土が堆積し、最終的に上層埋土で埋め戻され整地されたと思われる。中世の土師器、白磁、青磁、施釉陶器、瓦質土器のほか、弥生土器、古式土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、平瓦が出土した。

〔土坑SK1015〕 調査区北西部で確認した、円形の土坑である。規模は直径0.9m、深さ0.4mである。



第 41 図 (土坑 S K 1001・10・15、落ち込み S X 1016 実測図)



第42図 内郭一5 (土坑S K 1011 実測図)

埋土は茶褐色礫混じり土である。底面に方形の巨礫があり、小鍛冶遺構の可能性を考えたが、礫は被熱せず、また焼土や鍛造剥片なども確認できなかったことから小鍛冶遺構ではないと判断した。中世の土師器、瓦質土器のほか、古式土師器、須恵器、平瓦が出土した。

〔落ち込み S X 1016〕 調査区南西部で確認した、長方形の浅い落ち込みである。西は調査区外に拡がり、南は土坑 S K 1002 に切られており、また溝 S D 1007 と重複しこれより古い遺構である。規模は東西 2.5 m 以上、南北 3.7 m 以上、深さ 0.1 m である。埋土は黄褐色ブロック混じり暗灰色粘質土である。中世の土師器、陶器のほか、古式土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦片が出土した。埋土が周囲とはまったくことなる色調であり、何らかの施設に施された土間の可能性を考えたが、埋土は軟質の粘質土で、土間のように堅く叩き占められた様子は確認できなかったため、整地のひとつである可能性が考えられる。

〔溝 S D 1017〕 南北方向の溝である。溝 S D 1005 と重複し、これより古い遺構である。規模は幅 0.6 m、深さ 0.4 m、埋土は暗赤褐色礫混じり粘質土である。埋土から多量の土器類、特に土師器皿がまとめて出土した。中世の土師器、瓦質土器のほか、弥生土器、古式土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器が出土した。

〔溝 S D 1104〕 南北方向の溝である。北は土塁 S X 1101 の手前で途切れ、南は調査区外へ続く。規模は、幅 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.1 m、埋土は黄褐色混じり灰茶褐色粘質土である。いずれも小片であるが、埋土から弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、白磁が出土した。城存続期の遺構と思われるが、性格は不明である。

〔ピット〕 総数 133 基を確認した。その多くは東土塁からやや離れた地点に集中する。平面形は円～楕円形で、規模は径 0.2 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.5 m と大小様々である。埋土は茶褐色土、暗褐色土が多く、また黄褐色粘質土をブロック状に含むものも多くみられた。また、底面に礎石が残るもの (P 5・20・50・74・81・83・84)、柱痕跡が残るもの (P 17・28・29・60・62・93) を確認したが、建物を構成するような配列は確認できなかった。また第 11 次調査では、北土塁に近接する地点で多数のピットを検出したが、礎石や柱痕跡が残るものもあるが、第 10 次調査と比べて、全体に小振りで浅いものが多い特徴がみられた。

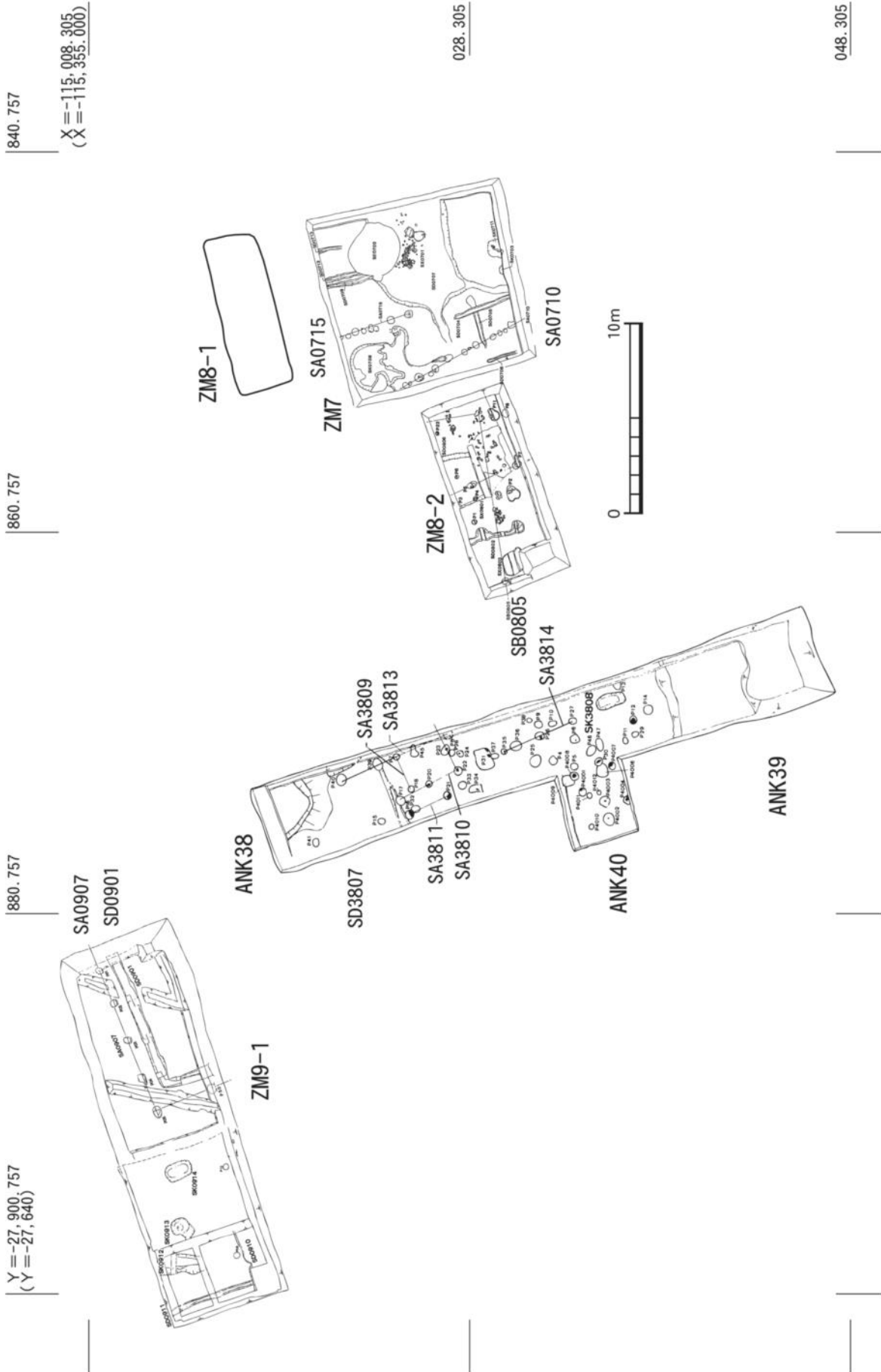
〔4〕 城外縁部

(1) 「西外郭」(第 43 図)

内郭推定西堀の西側では、物集女城跡第 7 ~ 9 次、中海道遺跡 38 ~ 40 次調査がおこなわれている。調査地点は、西堀から西へ第 7 次・第 8 - 1 トレンチ、第 8 - 2 トレンチ、中海道遺跡 38 ~ 40 次、第 9 - 1 トレンチ、第 9 - 2 トレンチの順に並んでおり、近接した位置でおこなわれている。

基本層序は、第 1 層：盛土・耕作土、第 2 層：近世後半以降の盛土、第 3 層：中世整地土、第 4 層：扇状地性堆積物、第 5 層：段丘・下位面構成層である。第 3・4 層が 15 ~ 16 世紀代の遺構面である。上面レベルは、第 7 次：不明、第 8 - 2 トレンチ：29.6 m、中海道遺跡第 38 ~ 40 次：29.6 ~ 29.9 m、第 9 - 1 トレンチ：30.1 ~ 30.4 m で、内郭 (28.0 ~ 28.2 m) とは 1.5 ~ 2.0 m ほど高い。

第 7 次調査では、16 世紀代の柵、柱穴群、塵芥廃棄土坑、流路跡を確認した。柵は、方位が内郭の施設に近いものと調査地の西を通る南北道路とほぼ並行するものがある。また西堀を東堀の規模で復原した場合、調査区内に西肩が想定されたが確認できなかった。



第43図 外縁部一1 (「西外郭」平面図)

第 8 次調査では、8-2 トレンチで 16 世紀前半～中葉を下限とする整地、礎石建物、掘立柱建物などを確認した。礎石建物は、東西 3 間以上、南北 1 間以上で、柱間は東西 3.1～3.4 m、南北は狭く 1.6 m である。ひとつのみ掘り方を有する。方位は N 10° W で内郭の施設の方位に近い。掘立柱建物は、東西 1 間以上、南北 1 間以上で、柱間は 2.4～2.7 m である。方位は N 25～30° W で、調査地の西を通る南北道路とほぼ並行する。礎石建物と掘立柱建物の先後関係は、切り合いがなく不明である。なお第 8-1 トレンチでは顕著な遺構は検出されていない。

第 9 次調査では、第 9-1 トレンチで、柵 1 条、溝 3 条、土坑 1 基を確認した。このうち、溝 S D 0901 と柵 S A 0907 は L 字状に見かけ上並行して配置される。柵 S A 0907 は、東西 4 間以上、南北 1 間以上で、柱間は 1.8～2.1 m である。方位は N 35° W である。ただし両者は微妙に方位を違えるようで、柵 S A 0907 が先行する。報告書では「分筆界（土地区画）あるいは（内）郭への通路に関わる施設に相当する」可能性を指摘する。また第 9-1 トレンチの北約 15 m の地点でおこなった第 9-2 トレンチでは、調査地の西を通る南北道路とほぼ並行する溝 2 条が検出されている。

中海道遺跡第 38～40 次調査では、16 世紀前葉の大形溝、柵、土坑と 16 世紀中葉の耕作関連溝を検出した。溝 S D 3807 は、西が調査区外に拡がり全貌が明らかでないが、南肩は北東-南西方向へ直線状に延びるのに対し、北肩は北西方向へ屈曲する。北へ折れ曲がるか、南北方向の溝が東西方向の溝へ取りつくものと思われる。東端での規模は、幅 4.7 m、深さ 1.6 m である。南肩はやや急に、北肩は緩やかに傾斜すること、底面は東側へむかって緩傾斜する特徴がある。報告書では「当該期の居住域を機能的に区画する溝」の可能性を指摘する。このほか、柵 4 条（柵 S A 3809・10・13・14）、1 間分を確認した柱列 1 条（柱列 S A 3811）、土坑 1 基（土坑 S K 3808）を検出した。溝、柵、柱列の方位は N 24～28° W で、調査地の西を通る南北道路とほぼ並行する。16 世紀中葉になると、上記の溝、柵、土坑は廃絶し、北西-南東方向の溝群が掘削される。遺構の方位は N 17～20° W である。報告書では「耕作にともなう畝溝」の可能性を指摘する。遺構検出面の標高は 29.6～29.9 m である。

（2）「北外郭」（第 44 図）

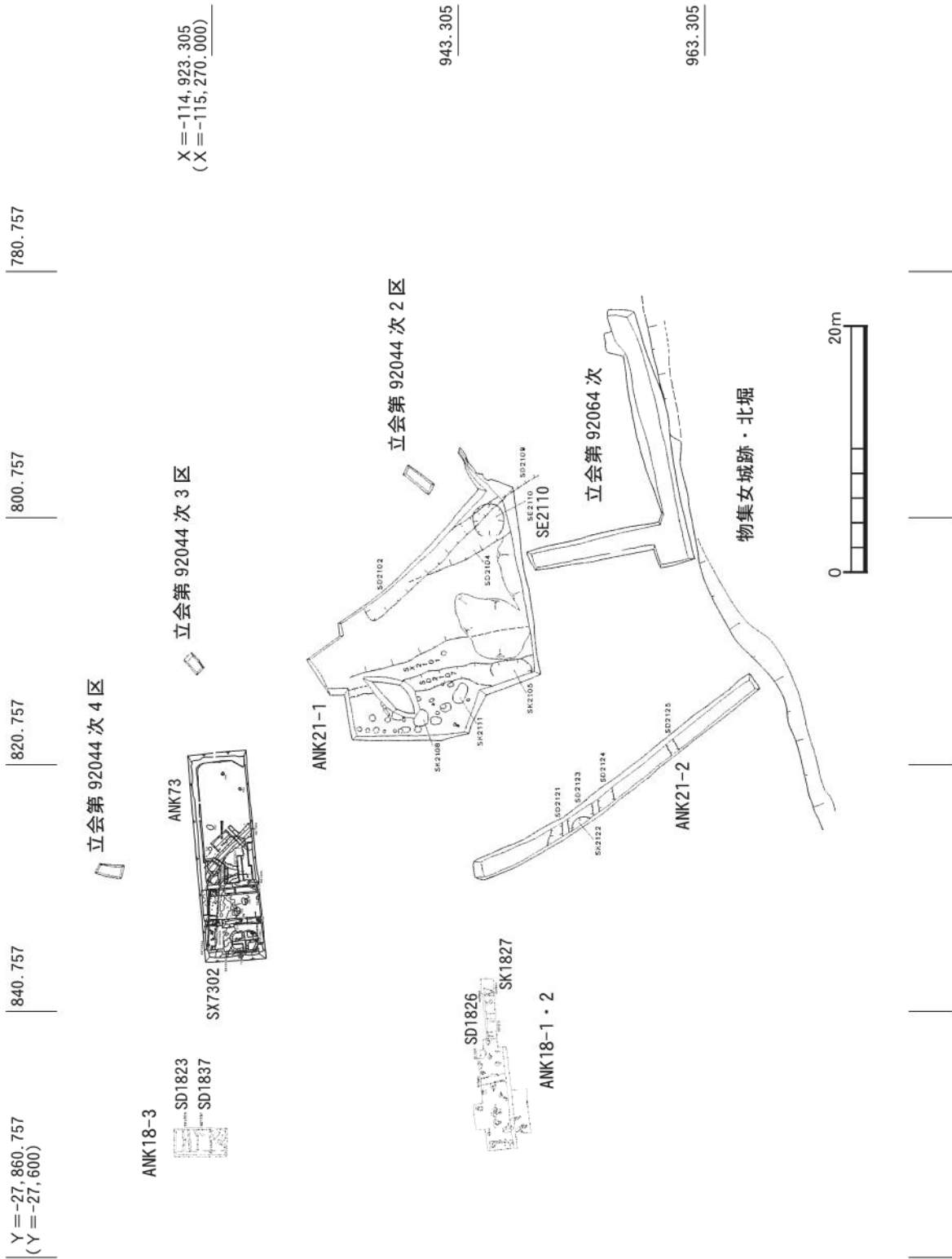
内郭北堀の北側では、中海道遺跡第 18・21・73 次調査がおこなわれている。

基本層序は、第 1 層：耕作土、第 2 層：礫混じり暗灰褐色土（近世包含層）、第 3 層：茶灰褐色系粘質土、第 4 層：扇状地性堆積物である。中世の遺構は第 3 層上面で検出した。検出レベルは、西側の第 18 次調査で 28.8 m、東側の 21・73 次調査で 27.7～28.3 m である。

中海道遺跡第 73 次調査では、東西方向から東で南に屈曲する土塁状施設の基礎を確認した。第 4 層系の礫土を盛り上げ、あわせて排水溝を構築する。16 世紀後半代の土師器・皿が出土した。

中海道遺跡第 18 次調査では、第 2 トレンチで溝 S D 1826、土坑 S K 1827、第 3 トレンチで溝 2 条（溝 S D 1823・37）を検出した。溝 S D 1826 は南北方向の溝で、規模は幅 2.0 m、深さ 0.5 m で、近世に掘り直しされる。溝 S D 1823・37 は並走する東西方向の溝で、S D 1837 では、溝の中位レベルで、拳～人頭大の礫が北西-南東方向に集中して出土した。溝 S D 1823・37 は字「中条」と「中海道」の境に位置する。

中海道遺跡第 21 次調査では、13 世紀代の北西-南東方向の溝、14 世紀代の石組み井戸 S E 2110、中世～近世の東西方向の溝を検出した。井戸 S E 2110 は、人頭大程度のチャート・砂岩を 10 段程度、



第44図 外縁部-2 (「北外郭」平面図)

深さ約 1.3 m 積み上げる、平面形は内法径約 0.9 m の円形である。基部に底を抜いた曲物を 2 重にして据えていた。上部は中世～近世の溝に壊されており、15～16 世紀代の遺物も出土している。

(3) 北西部 (第 28 図)

字中条の北西隅付近で、中海道遺跡第 5・37 次調査がおこなわれている。

中海道遺跡第 37 次調査では、13～14 世紀の溝 5 条 (溝 S D 3704・06・08・09・12)、土坑 1 基 (土坑 S K 3724)、凹み状遺構 2 基 (S X 3707・11)、段状遺構 1 基 (S X 3713)、ピット 26 基を検出した。

基本層序は、第 1 層：現代盛土、第 2 層：竹藪客土、第 3 層：扇状地性堆積物である。遺構は第 3 層上面で検出した。検出レベルは 30.2 m である。溝 S D 3704 は北東－南西方向の溝で、南肩のみ確認した。規模は、幅 1.9 m 以上、深さ 0.5 m である。南肩の方位は W 12～13° N である。溝底面の南側で、石組み S X 3721 を確認した。約 3.2 m にわたって礫が列をなして配置されており、溝 S D 3704 が石組み溝と判明した。出土遺物から 13 世紀代の所産と考えられる。溝の位置が、字「中条」と「中海道」の境に一致する。また溝 S D 3704 南肩に接して、段状の高まり (段状遺構 S X 3713) を検出した。報告書では、溝 S D 3704 掘削時の廃土を積み上げたものと推定しており、土塁状施設が存在した可能性を指摘する。

中海道遺跡第 5 次調査では、縄文時代中～後期の土器が出土したが、中世の顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

(4) 東部 (第 28 図)

堀南東隅に接して、第 22 次調査がおこなわれている。基本層序は、第 1 層：耕作土、第 2 層：中～近世遺物包含層、第 3 層：中世～平安時代包含層、第 4 層：扇状地性堆積物、第 5 層：段丘・下位面構成層である。中世の遺構面は 3・4 層上面で検出した。検出レベルは 25.8 m である。中世の検出遺構には、土坑 S K 2260・90 があるが、詳しい時期は特定できなかった。報告書では、土坑 S K 2290 は近世以降の大溝によって上部が破壊されおり、詳細は不明であるが、埋土中に人頭大程度の礫が比較的多く含まれており、石組み井戸の可能性を指摘する。

3 遺物 (第 45～62 図)

[1] 土師器・皿 (第 45～53 図)

(1) はじめに

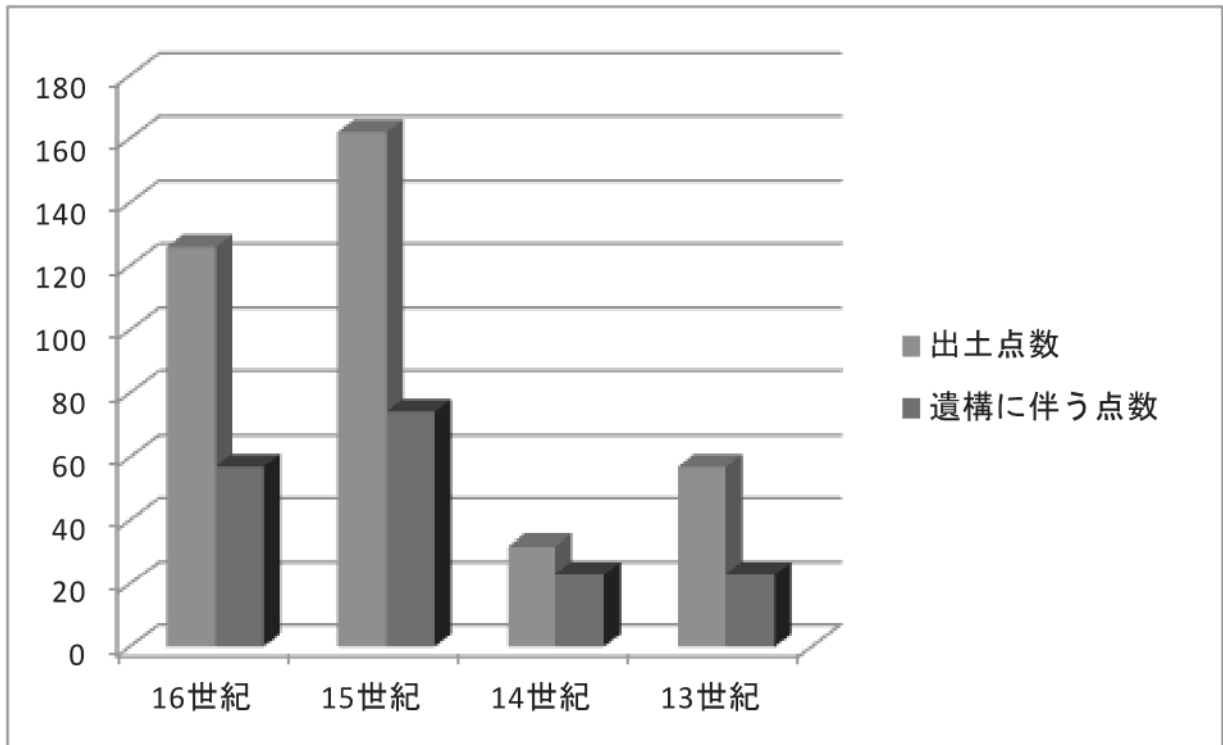
物集女城跡の発掘調査は、昭和 56 (1981) 年から平成 30 (2018) 年までの計 11 回おこなわれている。

今回は、報告されている第 11 次調査までの土師器皿および中世陶磁器類に焦点をおき、全体の出土状況を把握することを目的とする。

対象とする土師器皿・中世陶磁器類は、物集女城跡 (1～11 次) 並びに隣接する中海道遺跡 (1～72・74 次調査) 出土の遺物である。なお、陶磁器類の項目は、上記の対象遺跡では総数が少ないため、比較対象として、向日市内に所在する城館跡の一つである上植野城跡を追加した。

物集女城は正確な成立時期は不明だが、廃絶時期は物集女忠重 (宗入) が、細川藤孝の謀略により落命した天正 3 (1575) 年とされている。

この点から、基準となる年代は 15 世紀から 16 世紀とし、物集女城成立前後と廃絶後の景観を検討す



第45図 物集女城跡および中海道遺跡 年代別出土点数

るため、13世紀から16世紀、17世紀以降の土師器皿・陶磁器類および輸入陶磁器を対象とした。ただし、17世紀以降の土師器皿はほぼ認められなかった。

土師器皿の検討では、京都市内に流通する京都系と乙訓地域で生産流通する在地系の比率を確認する。なお、乙訓地域で京都系を模倣し製作された資料も京都系として取り扱うこととする。

(2) 資料

A 物集女城跡（内郭・堀）

〔内郭〕 物集女城の中心施設となる内郭では、147点の土師器皿が確認できた。うち、70点が遺構にともなう（第46図）。15世紀から16世紀は（17～35）が京都系となる。（17～35）や（37～39・44～58）といった皿Sが中心となるが、皿N r（40～43）が少量含まれる。包含層出土の資料では、皿Nも少量確認できた。

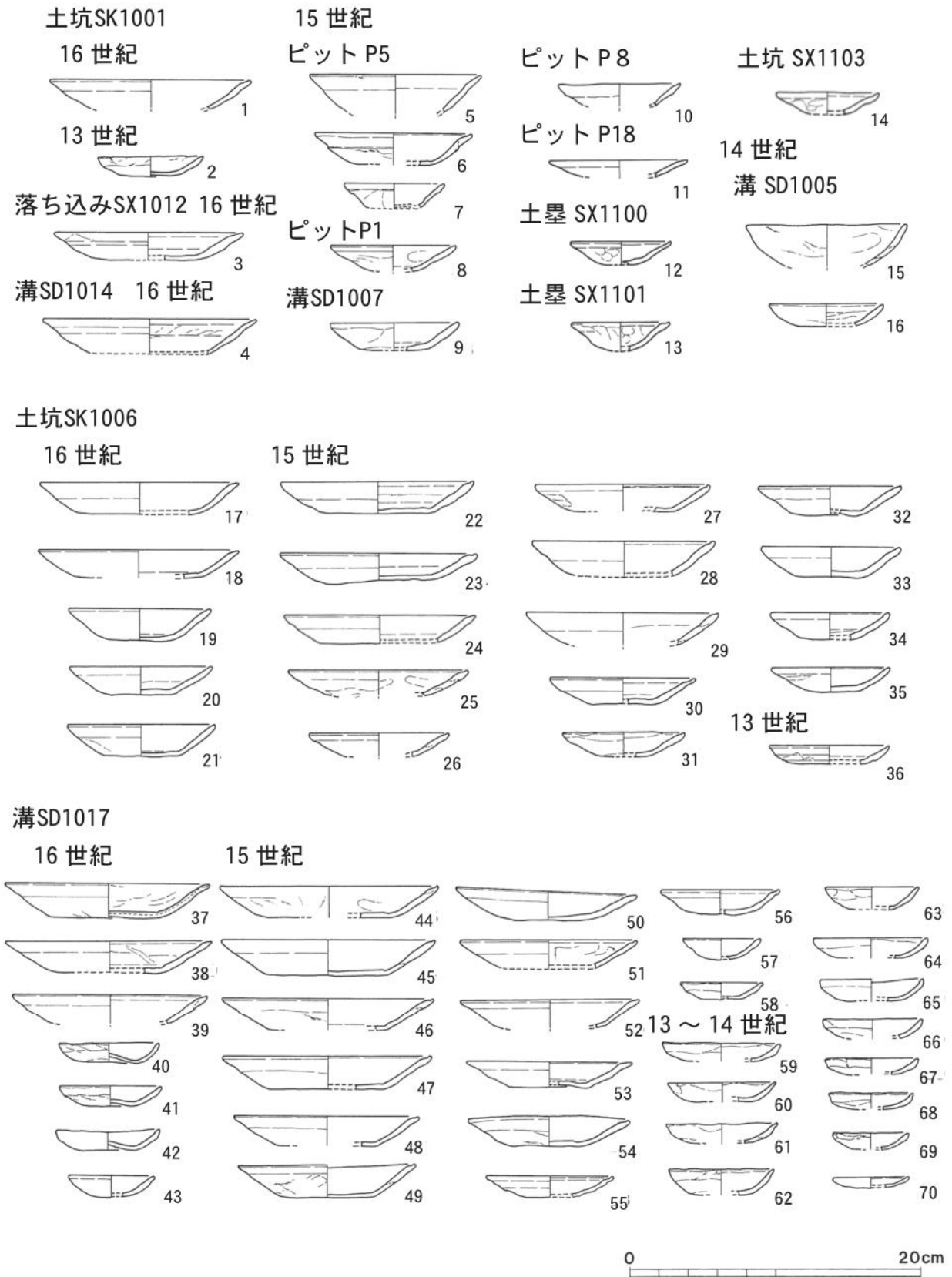
一方、13・14世紀は（2）や（36）（59～70）のように、在地系の資料が主体であることがわかった。山口氏の乙訓地域における編年（文献20）の中では、Ⅲ期に該当すると考えられる。

15・16世紀は土坑S K 1006や、溝S D 1017のように一括資料が中心となる。

また、包含層出土の資料（第47図）では、遺構にともなう資料と同様に、京都系の皿S（71～74）が認められ、15世紀も京都系が主体となる。また13・14世紀の製品は在地系（143～147）とみられ、第46図と大きな出土傾向の差は認められなかった。

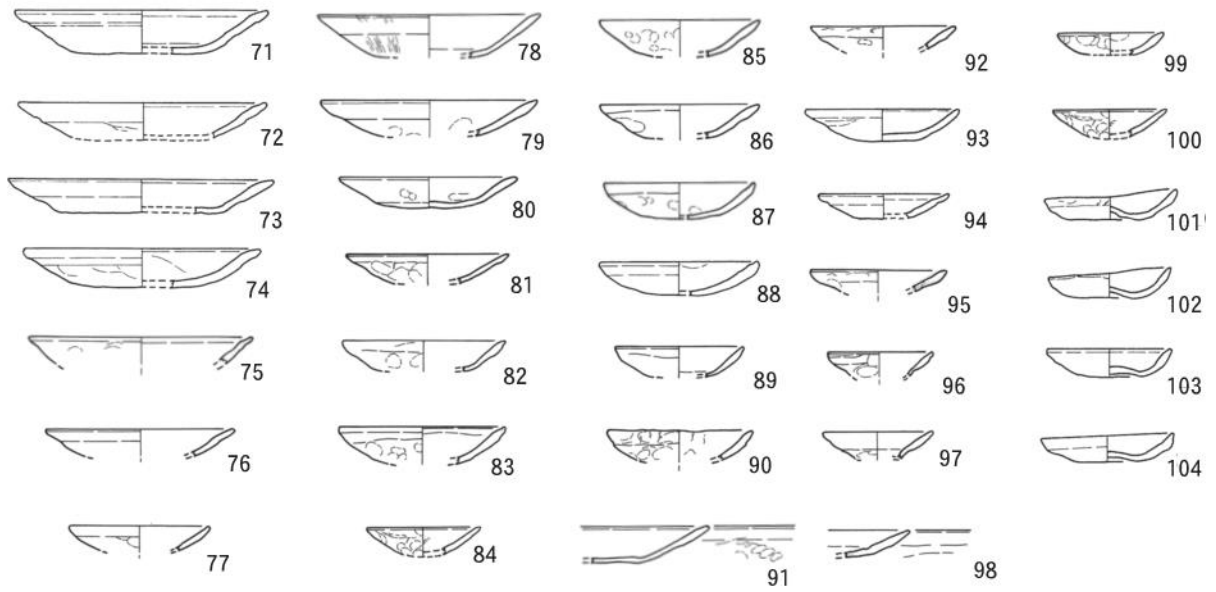
〔堀〕 堀にともなう資料が少ないため、同調査で出土した資料を全て掲載する。

北堀および東堀では、18点の土師器皿を確認した（第48図①）。総数は少ないが、15世紀から16世紀の京都系皿S（157・158）および皿N（154）が認められる。13・14世紀では在地系の浅い土師器皿（149

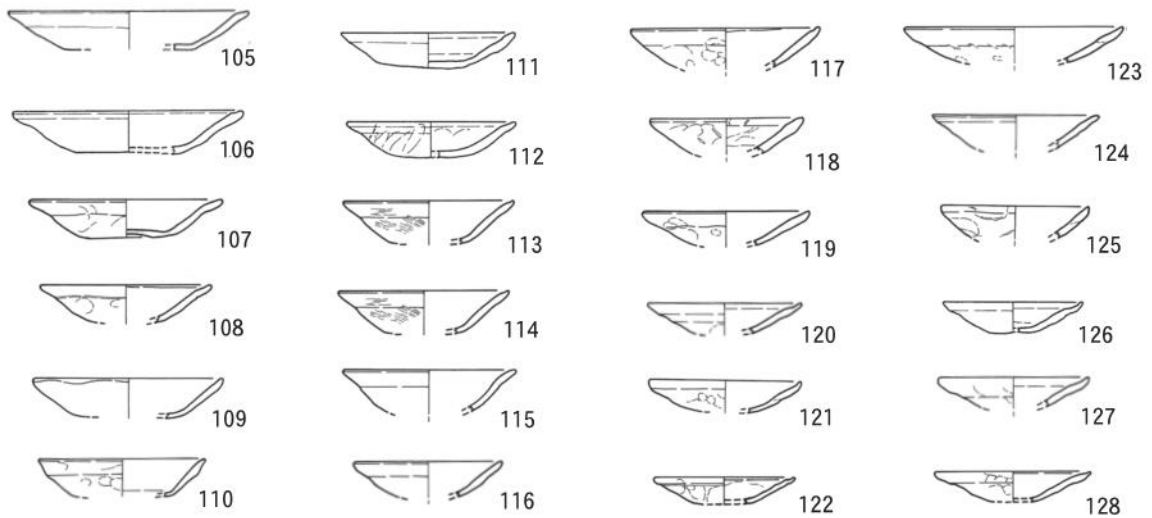


第 46 図 遺物実測図-1 (内郭 遺構出土)

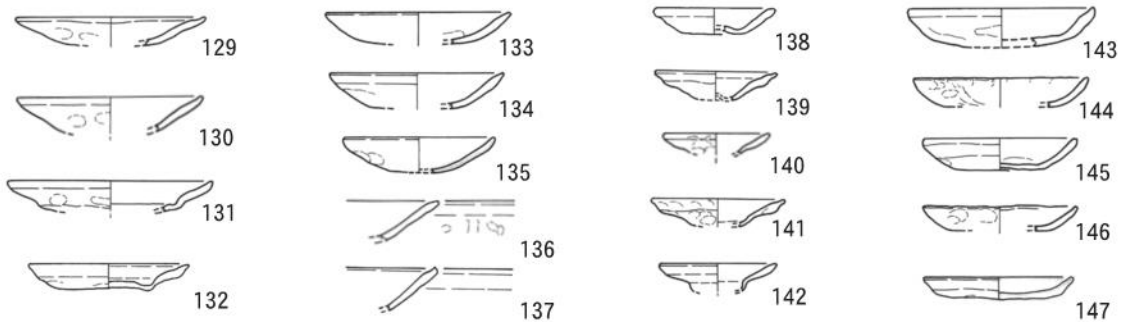
16世紀（包含層）



15世紀（包含層）



13世紀（包含層）



第47図 遺物実測図-2（内郭 包含層出土）

北堀

溝 SD2104

15 世紀



148

14 世紀



149



150

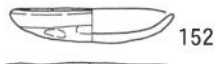
13 世紀



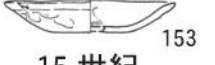
151

井戸 SE2110

16 世紀

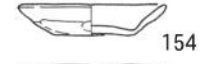


152



153

15 世紀



154



155

13 世紀

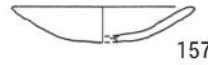


156

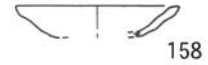
東堀

16 世紀

土坑 SX0405



157



158

溝 SD3301

15 世紀



159

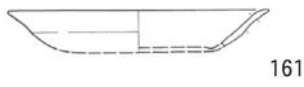
張り出し部 埋土

16 世紀末～17 世紀



160

東堀 16 世紀 (包含層)



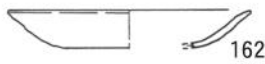
161



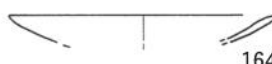
163



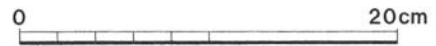
165



162



164

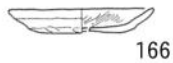


①堀 (北堀・東堀) 出土

北外郭

土坑 SK1820

15 世紀



166

溝 SD1831

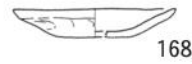
13 世紀



167

(包含層)

16 世紀



168

北西部

落ち込み SX3707

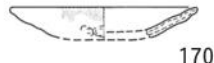
16 世紀



169

ピット P26

16 世紀



170

(包含層)

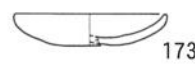
16 世紀



171



172



173

13 世紀

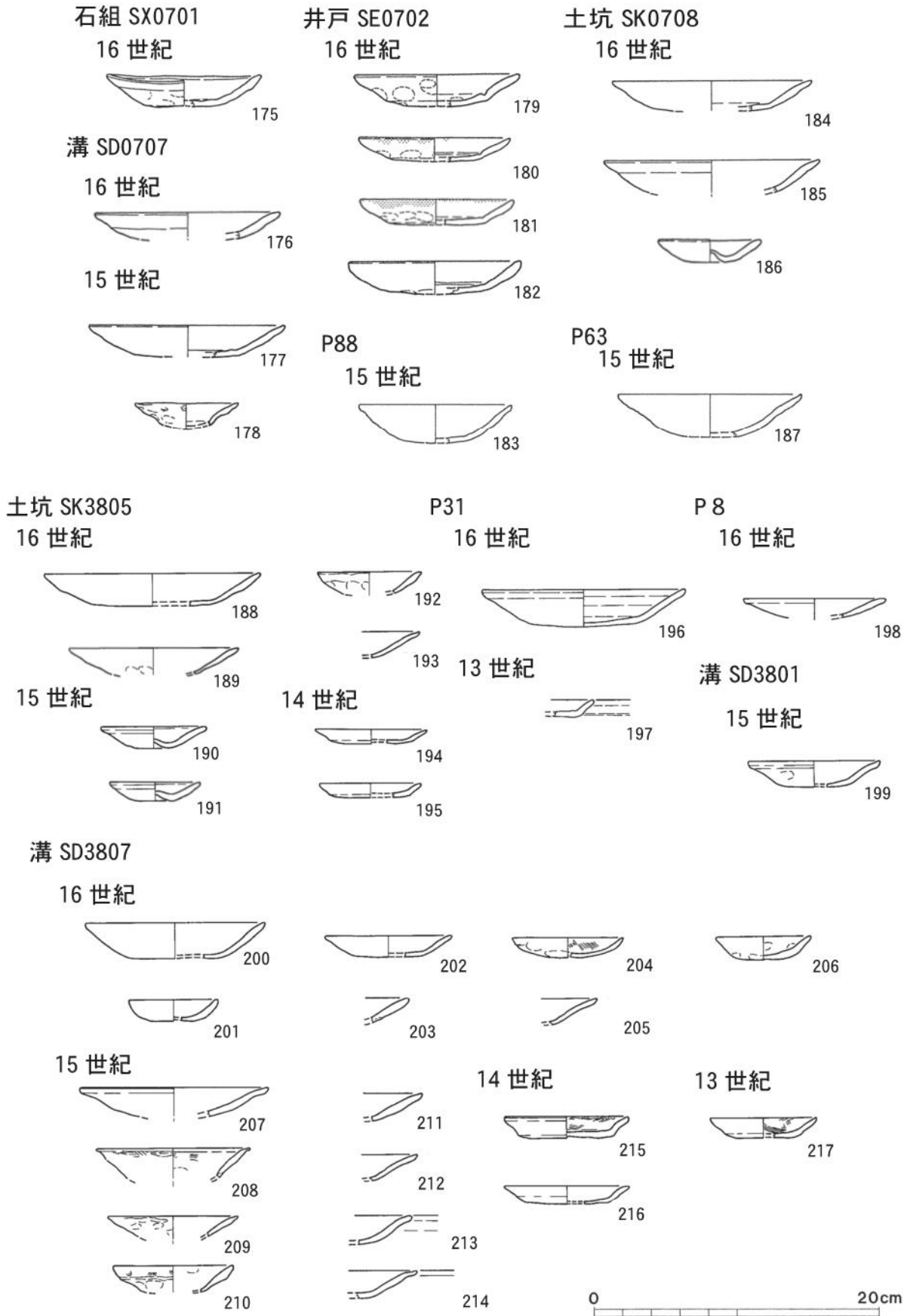


174



②「北外郭」・北西部 出土

第 48 図 遺物実測図-3 (北堀・東堀・「北外郭」)



第 49 図 遺物実測図 - 4 (「西外郭」 - 1)

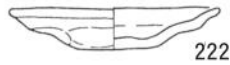
外郭 南西部 遺構出土

整地SX0801

16 世紀



218



222



225

15 世紀



219



223

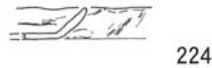


220

13 世紀



221



224

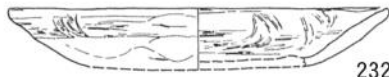
凹地 SX0804

15 世紀

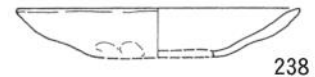
16 世紀 (包含層)



226



232



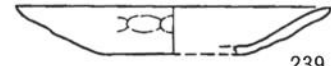
238



227



233



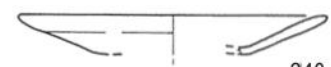
239



228



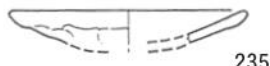
234



240



229



235



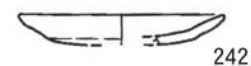
241



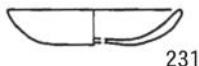
230



236



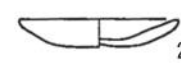
242



231



237

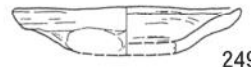


243

15 世紀 (包含層)



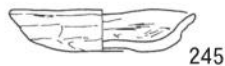
244



249



253



245



250



254



246



251



255



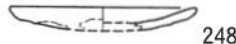
247



252



256

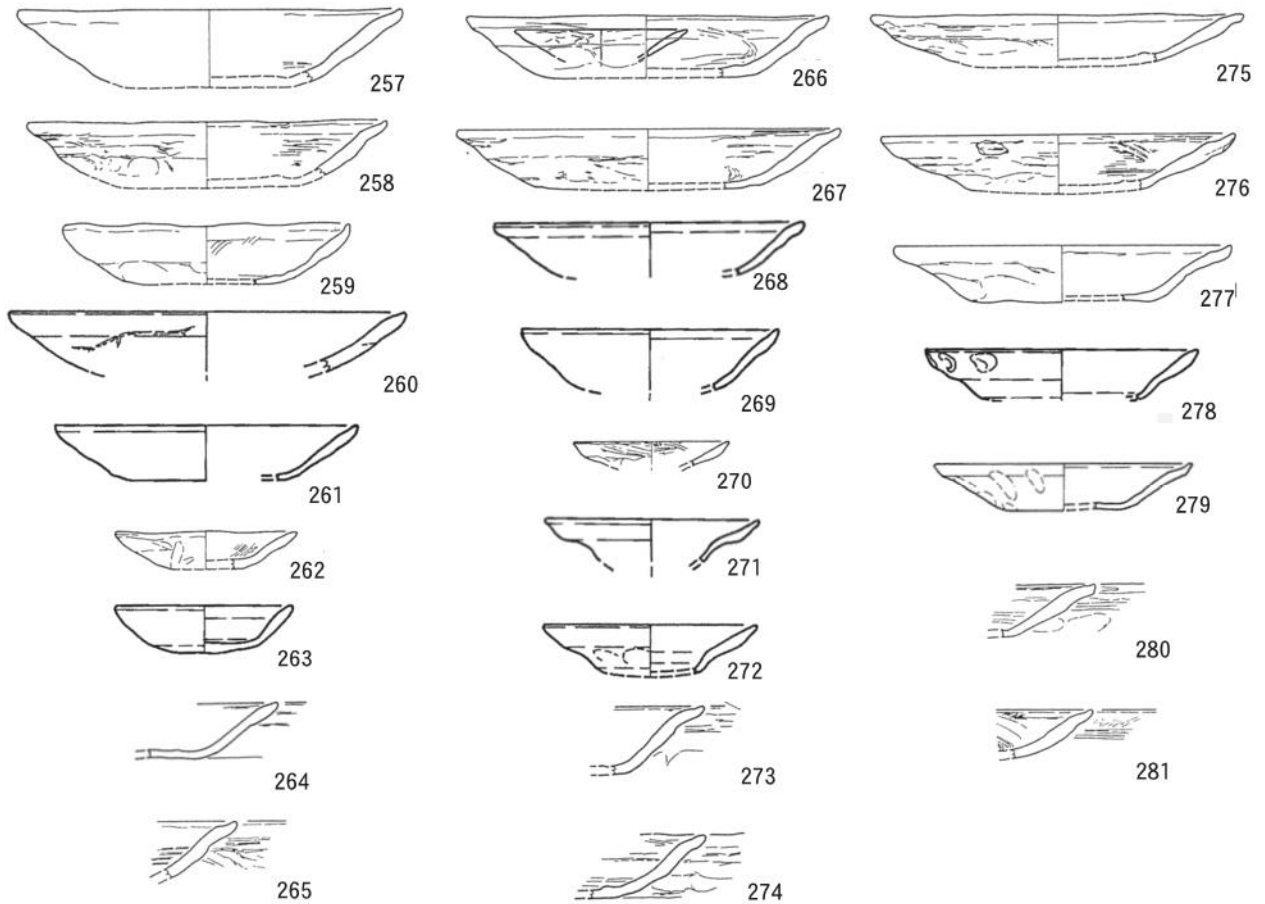


248

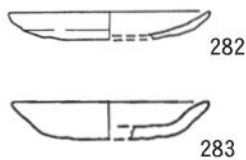


第 50 図 遺物実測図-5 (「西外郭」-2)

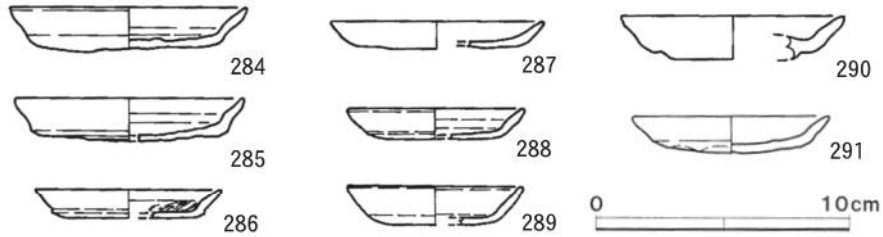
15世紀（包含層）



14世紀（包含層）



13世紀（包含層）



第51図 遺物実測図-6（「西外郭」-3）

～151)を確認した。

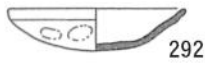
内郭との違いは、14世紀とみられる（149・150）が少量含まれる点である。2点は、乙訓地域の編年におけるⅢ期に該当すると考える。（160）は「張り出し部」出土で、16世紀後半～17世紀前半、廃城後の遺物と報告される。

B 物集女城跡（外郭）

〔北西部〕 点数が少ないため、「北外郭」と北西部を合わせて掲載する（第48図②）。「北外郭」3点、北西部6点の資料である。北外郭では、（166）が15世紀の在地系、（167・168）は京都系で13世紀と

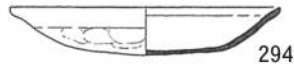
16 世紀

溝 SD103



15 世紀

土坑 SK01



P109



P101



13 世紀

溝 SD2504



① 中海道遺跡 北部 (府道以南)

16 世紀

土坑 SX5603



13 世紀

溝 SD5101



16 世紀 (包含層)



13 世紀 (包含層)



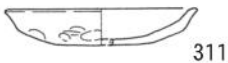
② 中海道遺跡 北部 (府道以北)

15 世紀

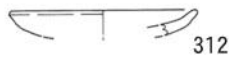
土坑 SK2306



14 世紀

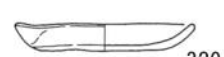
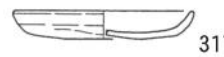


13 世紀



13 世紀

溝 SD7001



(包含層)

16 世紀



15 世紀

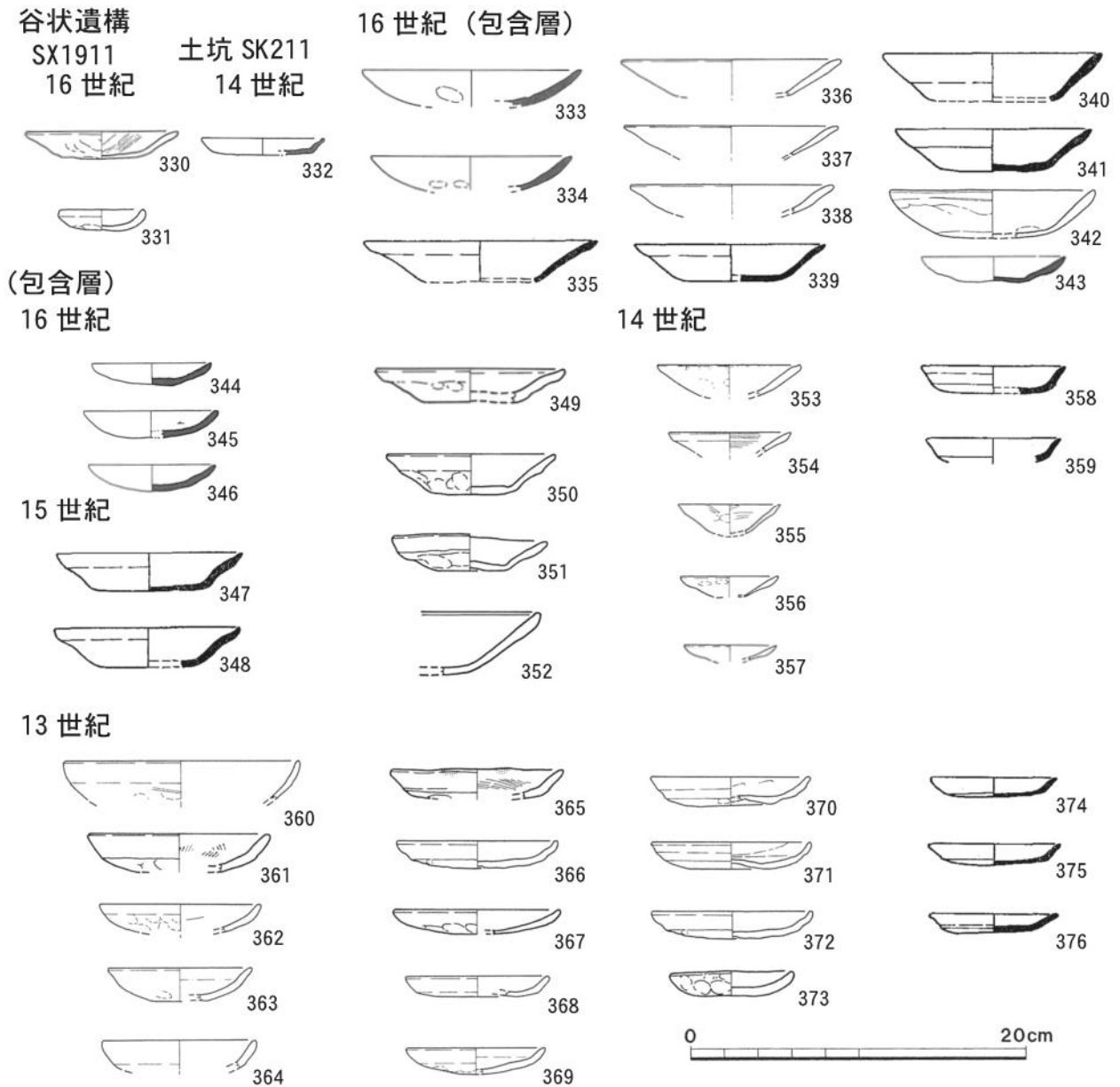


13 世紀



③ 中海道遺跡 南部

第 52 図 遺物実測図-7 (中海道遺跡 北部・南部)



第53図 遺物実測図-8 (中海道遺跡 西部)

16世紀とみられる。北西部の調査では16世紀の京都系、皿S (169・170)を確認した。13世紀は、京都系の(167)と在地系の(174)が認められる。「北外郭」を含む北部・北西部の調査件数、出土遺物が少ないため、検討は難しいことがわかった。

〔南西部〕「西外郭」とされる、物集女城周辺地区の中で最も調査件数が多い(第49～51図)。総数は117点にのぼり、遺構にともなう資料は51点である。

西外郭においても15・16世紀は皿Sを中心とした京都系の土師器皿(179～186)が主体となる。他にも、皿N(223・225)および皿Sh(190・191)が少量確認できる。また、13・14世紀は乙訓編年Ⅲ期にあたる(215～217)が認められる。

包含層出土の資料は、遺構にともなう資料と大きな違いはなく、15・16世紀は京都系(226～243・250～252・255～281)、13・14世紀は在地系(284～291)が主流となる。

C 中海道遺跡

〔北部(府道以南)〕 物集女城跡の北を東西に走る府道 201 号線以南から、物集女城外郭までの地区を 1 つのエリアにまとめた。ここに、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した、府道拡幅にともなう発掘調査も含める。以下、府埋蔵文化財調査研究センターと表記する。

当センターの調査による出土遺物も含めると、総数は 12 点である(第 52 図①)。このうち、向日市が実施した調査にともなう遺物は(303) 1 点である。型式学的な特徴から 13 世紀の京都系とみられる。府埋蔵文化財調査研究センターの調査では、15 世紀から 16 世紀の土師器皿が 11 点(292～302) 報告されており、皿 S および皿 N を中心とした京都系の資料である。この地区では在地系の遺物は認められなかった。

〔北部(府道以北)〕 府道 201 号線から北部の調査をまとめた(第 52 図②)。対象となる資料が少なく、遺物の総数が 6 点となる。(304・305) は皿 S の京都系の資料で、16 世紀と考えられる。一方、(306・307) は 13 世紀の在地系、乙訓編年におけるⅢ期と考えられる。この地区では、京都系の皿 N は確認できなかった。

包含層出土(308・309) は京都系とみられる。(309) に関しては、在地系の可能性も否定できないが、底部から口縁の立ち上がりが緩やかである点から京都系とした。

〔南部〕 中海道遺跡の南部にあたる。他の調査箇所と比べると、調査件数は少ないが、20 点の資料を確認した(第 52 図③)。20 点のうち、15 世紀以降は(310・325～328)、残る 15 点は 15 世紀以前である。特に 13 世紀の一括資料(313～324)が目立つ。

型式学的な特徴から(310・325～328) は京都系、(311～324・329) は乙訓編年のⅢ期にあたる在地系と考えられる。物集女城跡および中海道遺跡では、15・16 世紀の資料が多くみられ、13 世紀の資料が目立つ同地区はやや出土傾向が異なる。

〔西部〕 中海道遺跡の西部(物集女城跡の西部)は、住居空間が広がるとされている。総数は 47 点(第 53 図)で、遺構に関連する資料は(330～332)である。型式学的な特徴から(330・331)は 16 世紀の京都系皿 S、(332)は 14 世紀の在地系である。

包含層出土の資料も、おおむね 15・16 世紀が京都系(333～352)、13・14 世紀は京都系(353～357)と、在地系(358・359・374～376)が混在する。在地系の資料は、乙訓編年におけるⅢ期と考える。(351)のように器形の崩れから判断が難しい資料もあるが、今回は京都系に分類した。

この地区では京都系が主体となる。胎土が限りなく白色に近いが、皿 S と皿 N の判別は困難である。一方、在地系は、他の地区同様に、皿 N が主体である。

(3) 検討

以上、物集女城跡および中海道遺跡を 8 か所に区分し、それぞれの資料を集約した。全体の傾向として、15・16 世紀は京都系の皿 S および皿 S を模倣した製品を中心とし、皿 N と少量の皿 S h・N r の組成資料が主体となる。そして、13・14 世紀は在地系の浅いタイプの皿 N を中心とした組成資料が主体となることが確認できた。

遺物の出土数は城の中心部が最も多く、中心部から離れるほど、出土数が低下する傾向にある。また、グラフで提示したとおり(第 45 図)、15 世紀を境に出土数が大きく変化する。このことから、15 世紀

が物集女地域における転換点であるといえよう。その後、物集女城廃絶の影響か、16世紀後半以降の出土数は減少傾向に転じ、17世紀の資料はほぼ確認できなかった。

今回、地区ごとの出土状況を確認することで、物集女城（内郭）から離れるほど、土師器の出土量が減少することがわかった。この傾向は、城を中心として周辺に住居空間が広がることが要因とされている。

加えて、西部に関しては内郭と同じように、京都系の影響が強い資料が多い点から、前述した従来の推定を肯定する結果が得られたと考える。

（4）まとめ

今回、物集女城の年代に合わせ13世紀から17世紀という年代観を設定し、分析をおこなった。資料を収集した結果、対象外とした13世紀以前の古代に属する資料も多く見受けられた。物集女城が成立する以前より、長きにわたって継続的に利用された土地だと改めて確認するに至った。

また、14世紀以前および15世紀以降で、在地系の土師器皿から、京都系の土師器皿へ変化する傾向を確認した。これは、物集女城だけでなく中海道遺跡全域にも共通することから、15世紀を境に京都市内との交流が顕著になったと考えられる。京都系の流入については、16世紀後半頃から細川藤孝の勝龍寺城への入城が契機となり、京都系の土師器皿が出土するという特異性が強調されているが、^(文献20)実際は15世紀頃から京都系の土師器皿が流通していた可能性を本分析が示している。

これが物集女地域限定の様相か本稿で判断することは困難だが、今回の検討により15世紀に物集女城が成立し、ここを起因として物集女地域と京都市内の流通ルートが繋がったことは指摘できよう。

しかし、16世紀の資料は一定数確認できるが、廃城したとされる16世紀後半以降の土師器皿をほぼ確認することができなかった。少なくとも出土遺物からは、廃城するまで継続して住居空間が広がっていたと考えられ、外郭や周辺でも同様の傾向を確認している。これは後述する陶磁器類でも、ほぼ同じ結果が得られており、物集女城廃城後に住居空間が移動したと推察される。

以上のことから、物集女城の成立が地域にとって、大きな変化の契機となったことが土師器皿の検討から知ることができた。

本稿では、資料数の制約上、西部を中心とした検討にとどまっており、物集女城跡の東部においては、調査がおこなわれていないため、東部の資料増加を期待したい。

また中海道遺跡の東部についても、物集女城跡と同じく、本格的な発掘調査の事例がないことから、物集女城と周辺を包括した全体の動態を解明するに至らなかった。しかし、本稿が物集女城における住居空間の遷移についての理解の一助となれば幸いである。

〔2〕 陶磁器類・瓦質土器（第54～62図）

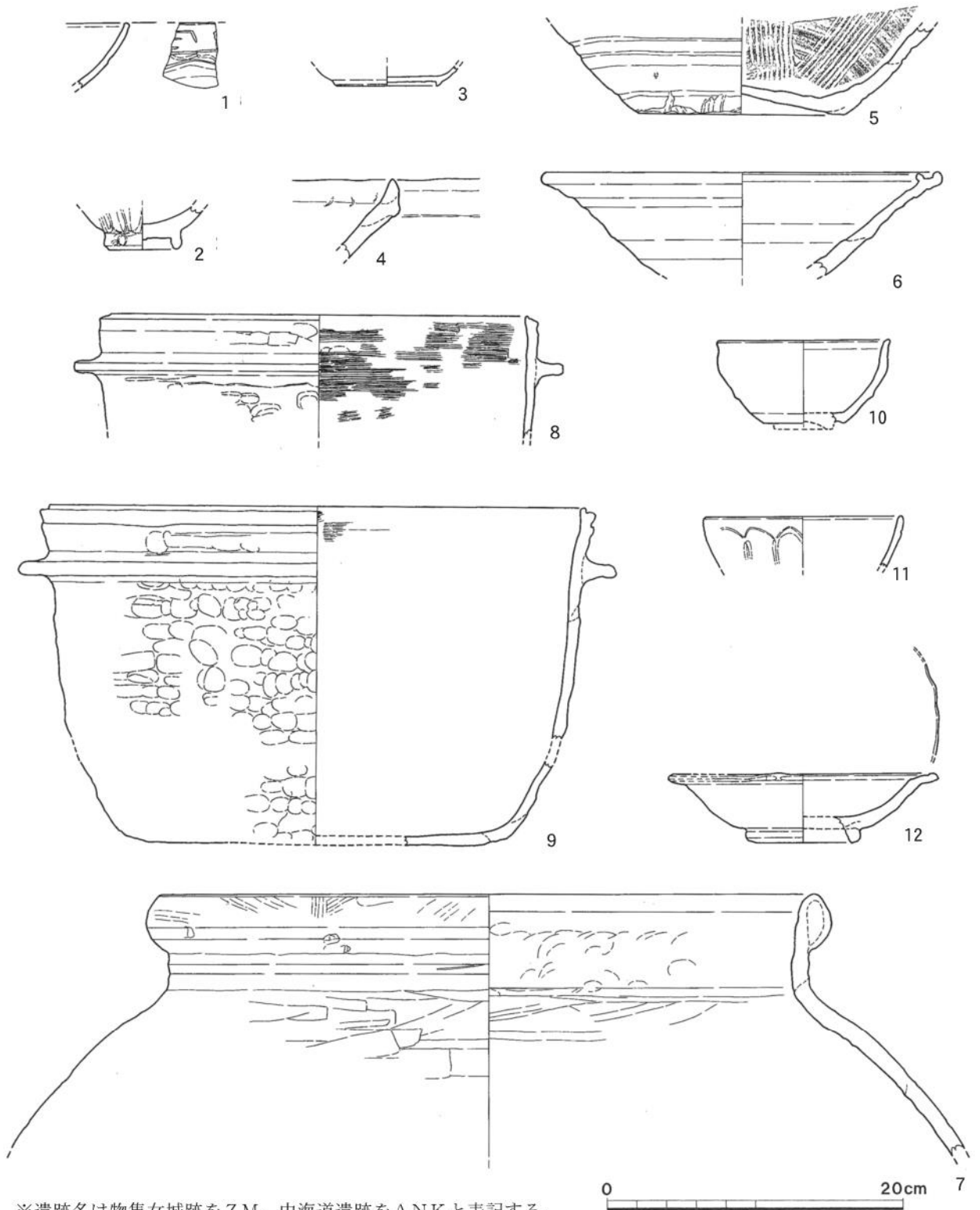
（1）出土遺物

A 物集女城跡

〔内郭1〕 内郭1に関連する遺物は12点（第54図）である。うち9点（1～10）が遺構にともなう。

内郭では、15世紀代の鎬蓮弁椀や輪花皿などの中国製青磁（2・11・12）が多く、体部に雷文が施された14世紀代の中国製青磁椀（1）と16世紀以前の青花^(註2)（3）も1点ずつ確認した。

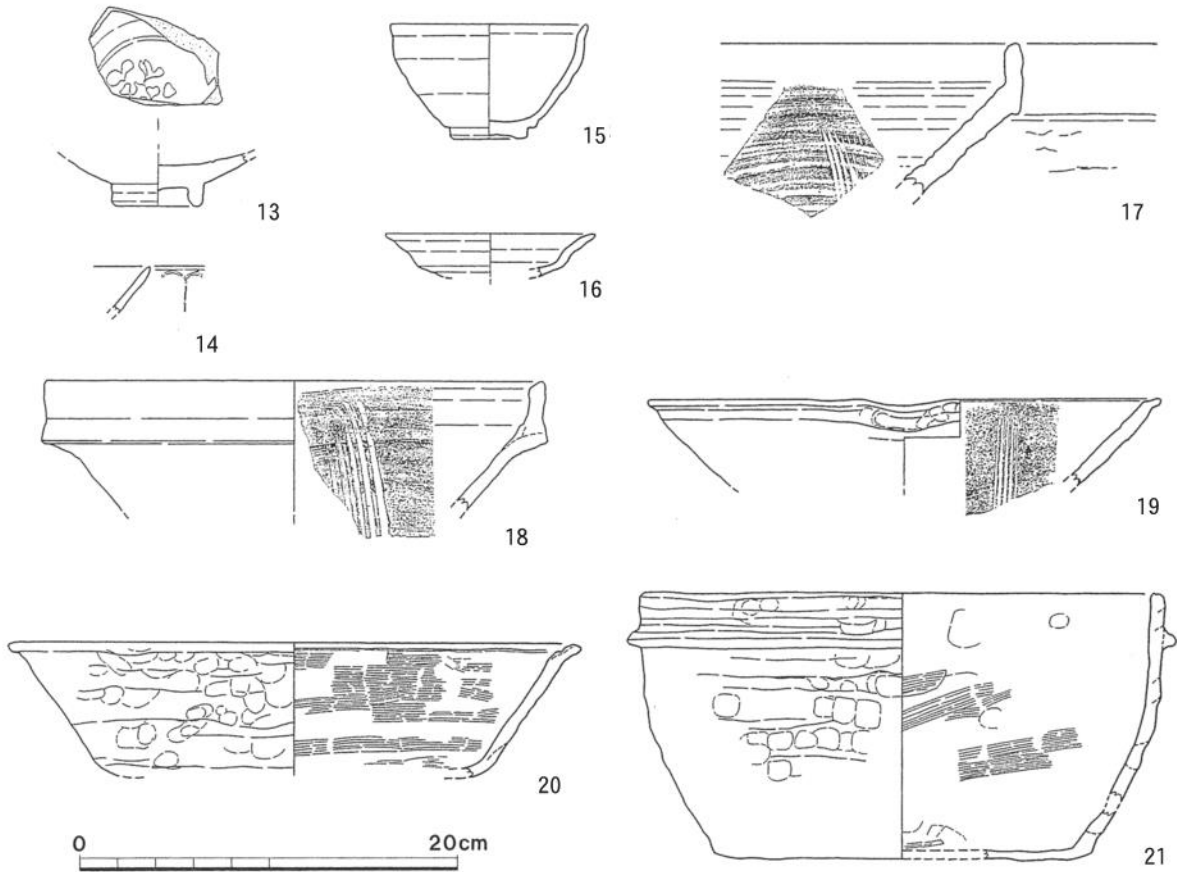
備前は播り鉢・壺（5・7）や、瓦質土器では羽釜（8・9）などの日常雑器が多い。瀬戸美濃系は、



※遺跡名は物集女城跡をZM、中海道遺跡をANKと表記する。

ZM10出土 落ち込みSX1013〔1・5〕 土坑SK1010〔2〕 溝SD1005〔4〕 土坑SK1011〔6〕 土坑SK1001〔7〕
 土坑SK1002+土坑SK1011〔8〕 柱穴SP38〔9〕 土坑SK1006〔10〕 第2層〔3〕 第3層〔11・12〕
 青磁〔椀(1・2・11) 皿(12)〕 青花〔皿(3)〕 焼締陶器〔播り鉢(4・5) 壺(7)〕
 施釉陶器〔鉢(6) 天目茶碗(10)〕 瓦質土器〔羽釜(8・9)〕

第54図 遺物実測図-9(内郭1)



Z M11 出土 包含層 [13] 第2層 [14・15・17] 第3層 [16] ピット16 [18] 土塁 SX1101ピット39 [19]
土塁 SX1100 構成土 [20・21]
青磁 [碗 (13・14)] 施釉陶器 [天目茶碗 (15) 皿 (16)] 焼締陶器 [播り鉢 (17～19)]
瓦質土器 [鍋 (20) 羽釜 (21)]

第55図 遺物実測図－10 (内郭2)

鉢^(註3) (6) と天目茶碗 (10) が入る。1点のみだが、信楽の製品として、播り鉢の口縁片 (4) を確認している。丹波の製品は確認できなかった。

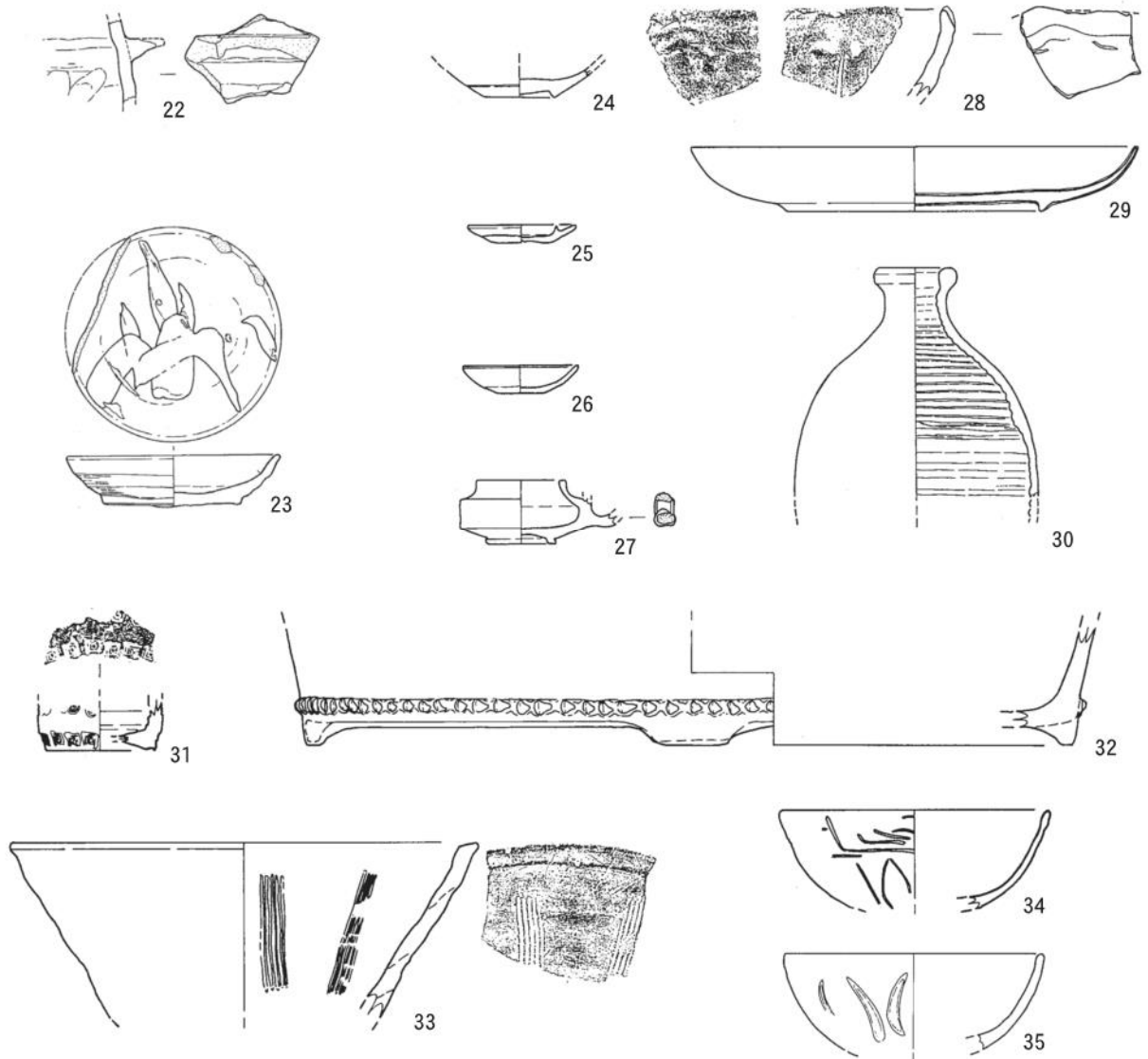
内郭1では、播り鉢や壺などの日常雑器が目立つが、嗜好品や茶陶に関連する中国製青磁 (1・2・11・12)、青花 (3) ならびに、天目茶碗 (10) が含まれる。

遺物は、15世紀から16世紀の製品が中心となり、17世紀以降の製品は確認できない。

〔内郭2〕 内郭1と違い、中心部より土塁に近い調査区になるため、分割して資料を掲載した。9点の遺物が出土しており (第55図)、遺構にともなう遺物は4点 (18～21) である。

内郭1と同様に15世紀の中国製青磁碗を2点 (13・14) 確認した。(14) は、鎬蓮弁を確認することができる。瀬戸美濃系は、天目茶碗 (15) と丸皿 (16) である。どちらも16世紀の製品と考えられる。焼締陶器播り鉢では、備前が2点 (17・18) と、信楽が1点 (19) 認められる。瓦質土器は、15世紀の鍋 (20) と16世紀の羽釜 (21) を確認している。

内郭1と比較したところ、同様の組成となることがわかった。内郭全体の製品内訳はグラフの通りである (第58図グラフ1)。



ZM2 出土 東堀 2-3 トレンチ 第 3 層 [24] 第 1 層 [25 ~ 30]

ZM3 出土 北堀 3-2 トレンチ 第 2e 層 [22] 第 2e・3 [23]

ZM4 出土 東堀 ~ 土塁 土坑 SK0405 [31・33] 土坑 SK0404 [32] 第 3 層 [34]

ANK37 出土 溝 SD3707 [35]

焼締陶器 [羽釜 (22) 挿り鉢 (28・33) 徳利 (30)] 施釉陶器 [鉄絵皿 (23) 皿 (25・26) 把手付小壺 (27)]

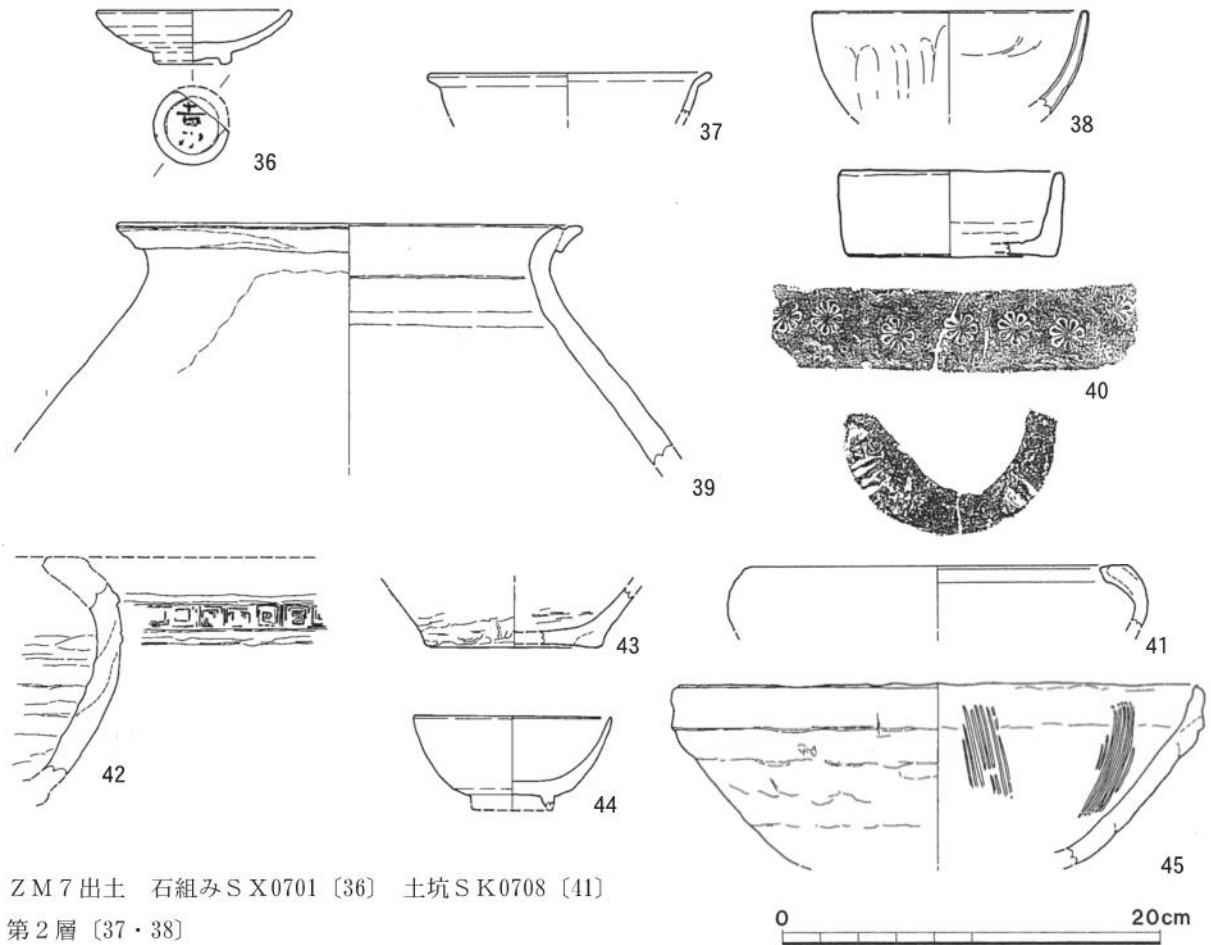
染付磁器 [大皿 (29)] 瓦質土器 [瓶 (31) 火鉢 (32)] 青花か [椀 (24)] 青磁 [椀 (34・35)]

第 56 図 遺物実測図 - 11 (堀・土塁・「北外郭」)

〔堀・土塁〕 北堀、東堀、東堀～土塁に関連する遺物は 13 点である (第 56 図)。堀ならびに、土塁の遺物が少ないため、「北外郭」を含めた 14 点をまとめて掲載する。

京焼と瓦質土器が最も多くみられ、次いで丹波・信楽・中国製青磁となる。若干ではあるが、瀬戸美濃系や染付磁器も含まれる。

東堀南部第 1 層からは、17 世紀の染付磁器の大皿 (29) と 18 世紀の京焼 (25 ~ 27) が出土している。本遺構の遺物は、16 世紀から 18 世紀と年代の幅が広く、19 世紀の丹波の徳利 (30) が混入すること



ZM7出土 石組みSX0701〔36〕 土坑SK0708〔41〕

第2層〔37・38〕

ZM8出土 第2b層系〔39〕 第2層〔45〕

ZM9出土 第1層a〔44〕 第2a層以浅〔40〕 盛土～第2層〔42〕 西壁断面〔43〕

施釉陶器〔小皿(36) 碗(44)〕 青磁〔碗または杯(37) 碗(38)〕 瓦質土器〔香炉(40) 火鉢(41・42)〕

焼締陶器〔壺(39) 播り鉢(43・45)〕

第57図 遺物実測図－12 (「西外郭」)

から、廃絶後から江戸時代にかけて、自然埋没したと考えられる。^(註4)

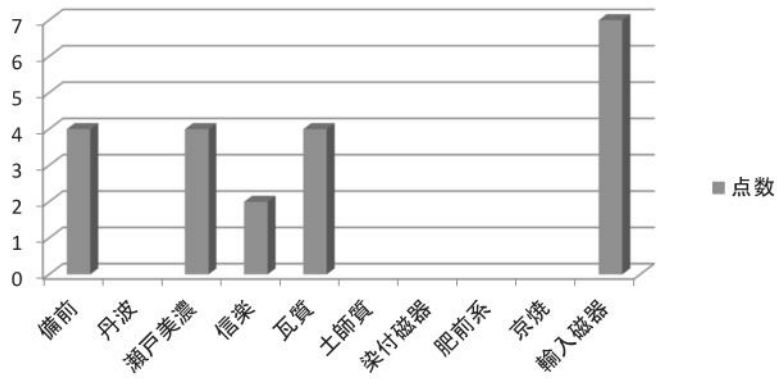
東堀～土塁構築土では、15世紀の瓦質土器瓶の底部(31)、信楽の播り鉢(33)が出土している。また16世紀は、瓦質土器の大形火鉢(32)が認められる。

堀および土塁も、日常雑器が大半を占めるが、丹波の製品と、17世紀以降の遺物が確認されたことは内郭との相違点である。

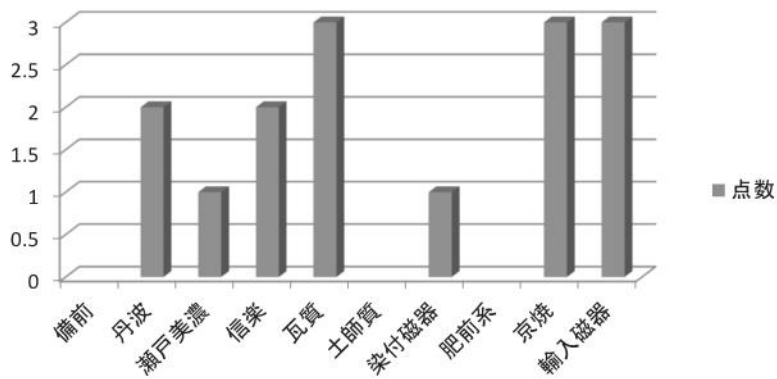
日常雑器以外では、中国製と思われる底部碁笥底の磁器(24)のほか、14世紀とみられる外面上半に雷文、下半に蓮弁を施す中国製青磁碗(34)と15世紀とみられる蓮弁を施す青磁碗(35)が認められる。

土塁構成土は、14世紀と比定する中国製青磁も含むが、15世紀から16世紀の遺物が主体となるため、土塁の構築年代と、物集女城成立年代の齟齬はない。

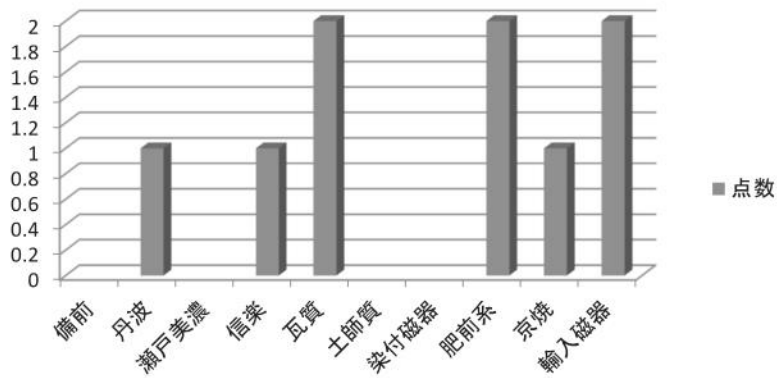
一方、北堀第2・3層から出土している志野織部の鉄絵皿(23)は、他の出土遺物とは異なり、京都市内でも流通する17世紀の製品と推察される。1点のみのため、性格は不明である。堀・土塁から出土した製品の内訳はグラフの通りである(第58図グラフ2)。



グラフ 1 内郭



グラフ 2 北堀・東堀～土塁・「北外郭」



グラフ 3 「西外郭」

第 58 図 物集女城跡 地区別出土品内訳

〔西外郭〕 西外郭に関連する遺物は10点である。(第57図)うち、施釉陶器小皿(36)が遺構にともなう。

瓦質土器、肥前系陶器、中国製青磁のほか、丹波、信楽、染付磁器が出土しているが、備前・瀬戸美濃系の製品は入らない。

本地点を、内郭および堀・土塁と比較した場合、堀・土塁の組成と類似する。製品の内訳は、グラフの通りである。(第58図グラフ3)また、17世紀代の肥前系陶器(36・44)が入ってくることが特徴である。器種は、信楽の壺(39)、播り鉢(45)、瓦質土器火鉢(41・42)といった日常雑器が主体となる。

一方、茶陶に属する瓦質土器香炉(40)も含まれる。他にも遺構にともなっていないが、内郭と同様に、15世紀の中国製青磁碗または杯(37・38)も確認できる。

西外郭の出土遺物は中心地である物集女城跡と傾向が似ていることから、物集女城に関係する住居空間が広がると推定される。遺構にともなう遺物は少ないが、中国製青磁を含め15世紀から17世紀の年代におさまることがわかった。物集女城跡における、出土した製品の内訳は図の通りである(第62図グラフ7)。

物集女城跡は、中心施設と考えられる内郭で、中国製青磁が多く出土している。また、国内の製品と比較すると、15世紀から16世紀の備前・丹波・信楽・瀬戸美濃系の製品が主体となる。ただし、堀は廃絶後の自然埋没であるため、17世紀以降の遺物が他の箇所よりも多い傾向となることがわかった。

B 中海道遺跡

対象となった遺物の総数は18点である(第59図)。

輸入陶磁器は中国製青磁碗(46～48)が確認できた。中国製青磁については、物集女城跡でも同年代の製品が出土しているため、14～15世紀の製品が一定数この地域に流通していたと考えられる。

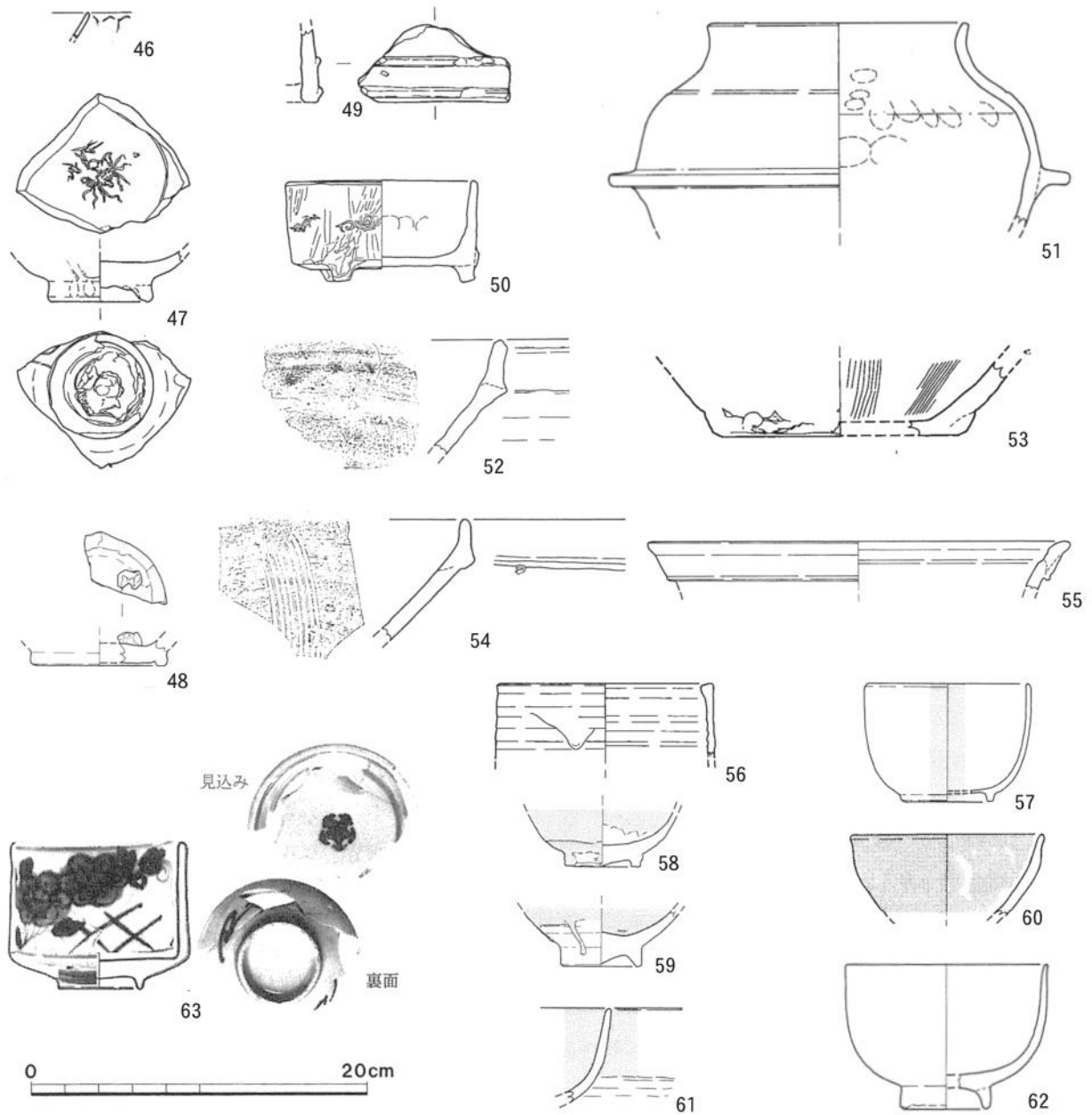
また、日常雑器では瓦質の火鉢(49)や備前播り鉢(52～54)の他にも、信楽の甕(55)が確認できる。嗜好品では香炉(50・56)ならびに茶釜(51)、天目茶碗(60)といった茶陶関係の製品が多い。15世紀後半～16世紀が主体となる。年代は新しくなるが、18世紀以降と思われる染付磁器碗(63)および京焼とみられる碗(57・58・61・62)と、京焼または肥前系の碗(59)も認められた。

中海道遺跡においては、調査回数に対する出土遺物の少なさが目立つ。また、出土品の内訳は、グラフの通りである(第61図グラフ4)。陶磁器類の年代は15世紀から18世紀と幅広く、物集女城存続期(15世紀から16世紀)の日常雑器や茶陶関連の遺物が中心となる。一方、18世紀の染付磁器や京焼も認められるため、物集女城廃絶後も人の住居空間が存在していた可能性はあるが、本稿で取り扱う陶磁器類のみで、廃絶後の景観をとらえることは困難である。

C 上植野城跡

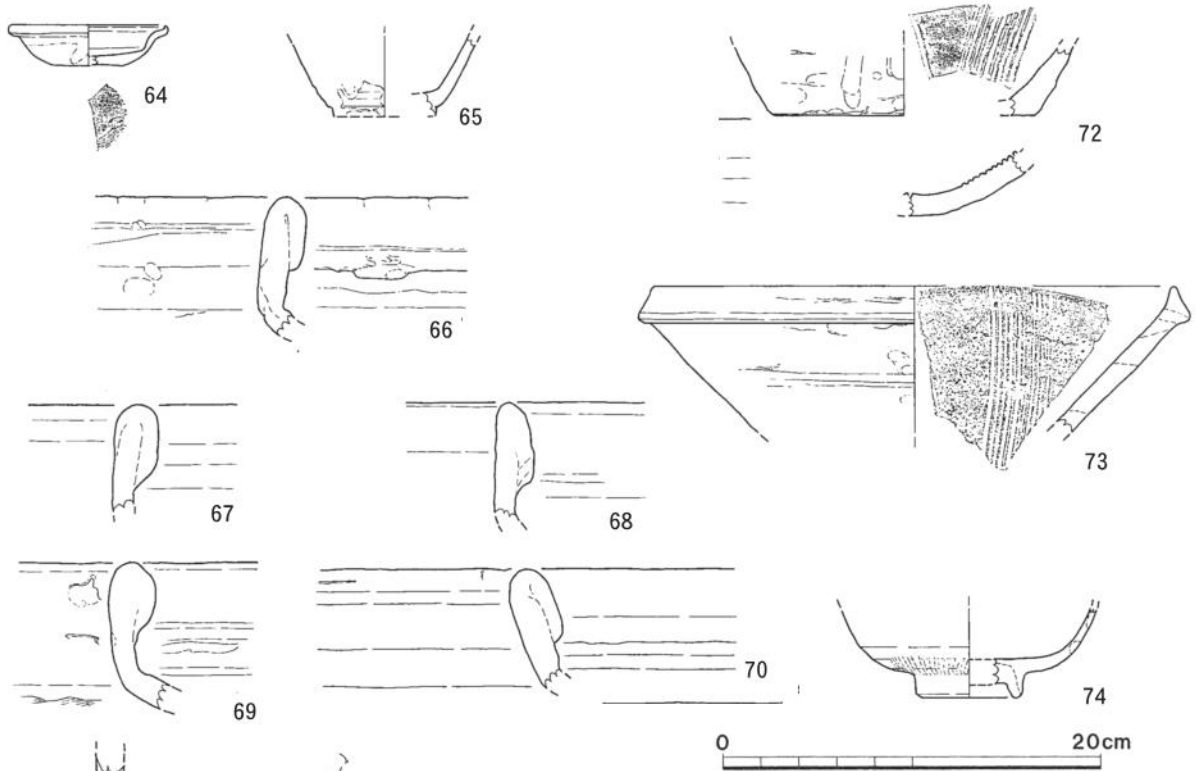
上植野城跡は、向日市上植野町に所在する中世の城館跡である。遺跡範囲は、平安～室町時代の集落跡である西小路遺跡と重複する。15世紀の史料に名前が登場し、左京第563次調査では、郭(堀・虎口・土居基底)に関わる遺構を確認している^(文献21)。対象となった陶磁器類は18点である(第60図)。

遺物の半数を備前が占め、壺の口縁部や体部片(66～71)が多い。また物集女城跡と同様に、下半に鎬蓮弁を施すとみられる中国製青磁碗(74)を1点確認した。その他、備前の播り鉢(72・73・77～80)、土師質の羽釜(81)や、瀬戸美濃系の折縁皿(64)・卸目皿(75)のような日常雑器が多い。茶陶では、瀬戸美濃系の天目茶碗(65・76)が認められる。

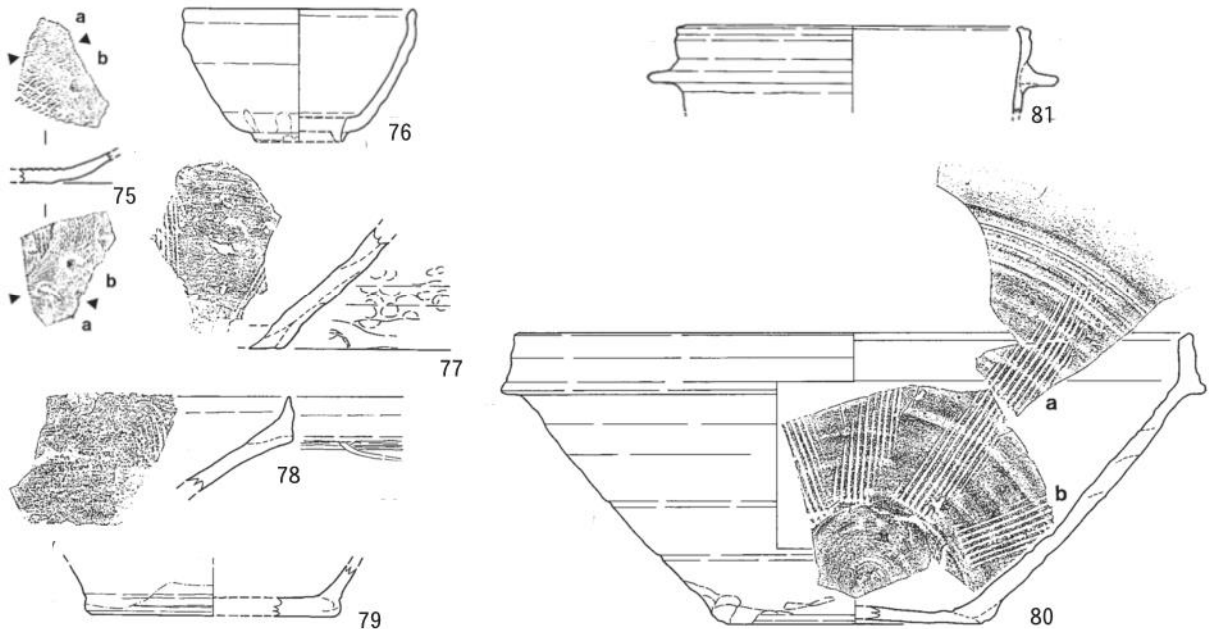


ANK-18-2 土坑SK1820 [56] ANK21 土坑SK2108 [50] ANK30 第2層 [47・51]
 ANK38 土坑SK3805 [49] 溝SD3807 [53] ANK40 第2層 [62]
 ANK52・54 溝SD5202 [52・55] ANK53 落ち込みSX45 [46] ANK56 SX5603 [57～59・61]
 第3b・C層以浅 [48] ANK58 第2a層 [60] ANK64 包含層 [54・63]
 青磁 [椀 (46～48)] 施釉陶器 [香炉 (56) 椀 (57～59・61・62) 天目茶碗 (60)]
 瓦質土器 [火鉢 (49) 香炉 (50) 茶釜 (51) 焼締陶器 [挿り鉢 (52～54) 甕 (55)] 染付磁器 [椀 (63)]

第 59 図 遺物実測図-13 (中海道遺跡)

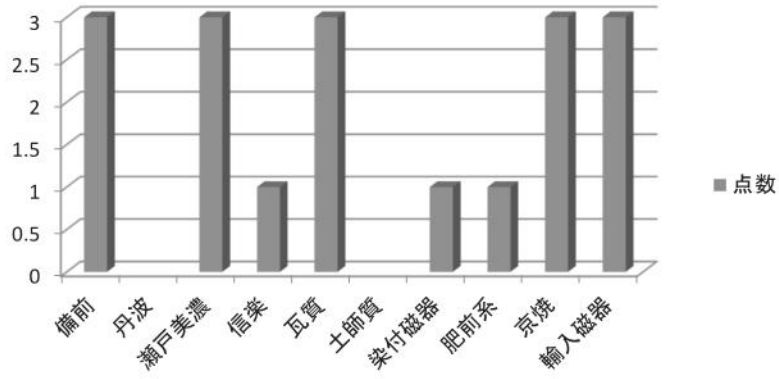


左京第563次 (7ANFKZ-7) 溝S D56301 [64・67・68]
 溝S D56302 [66・72・73] 第2b層-1層 [65] 第1層 [70・74]
 炉跡S X56305 [69・71]
 中国製青磁 [椀 (74)] 施釉陶器 [皿 (64) 天目茶碗 (65)]
 焼締陶器 [壺 (66～71) 搦り鉢 (72・73)]

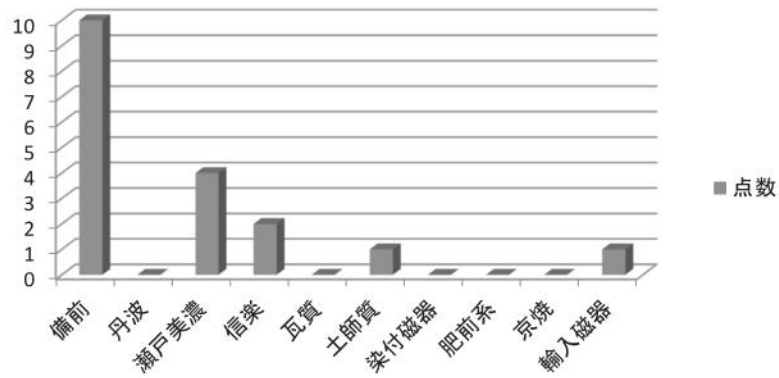


向日市第13128・14078次 (7ANFKZ地区) 出土 包含層 [75～81]
 施釉陶器 [卸目皿 (75) 天目茶碗 (76)] 焼締陶器 [搦り鉢 (77～80)] 土師器 [羽釜 (81)]

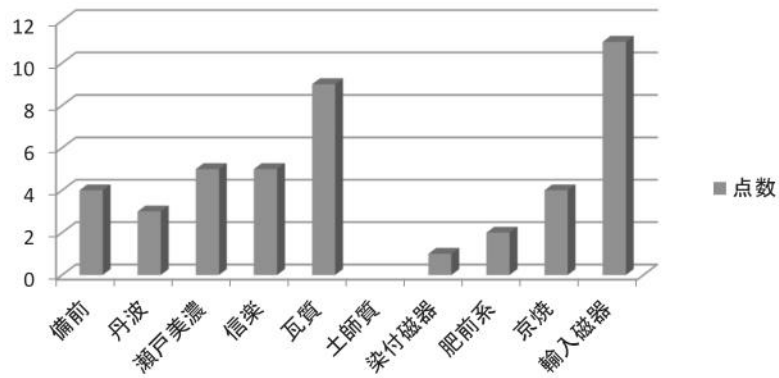
第60図 遺物実測図-14 (上植野城跡)



グラフ 4 中海道遺跡

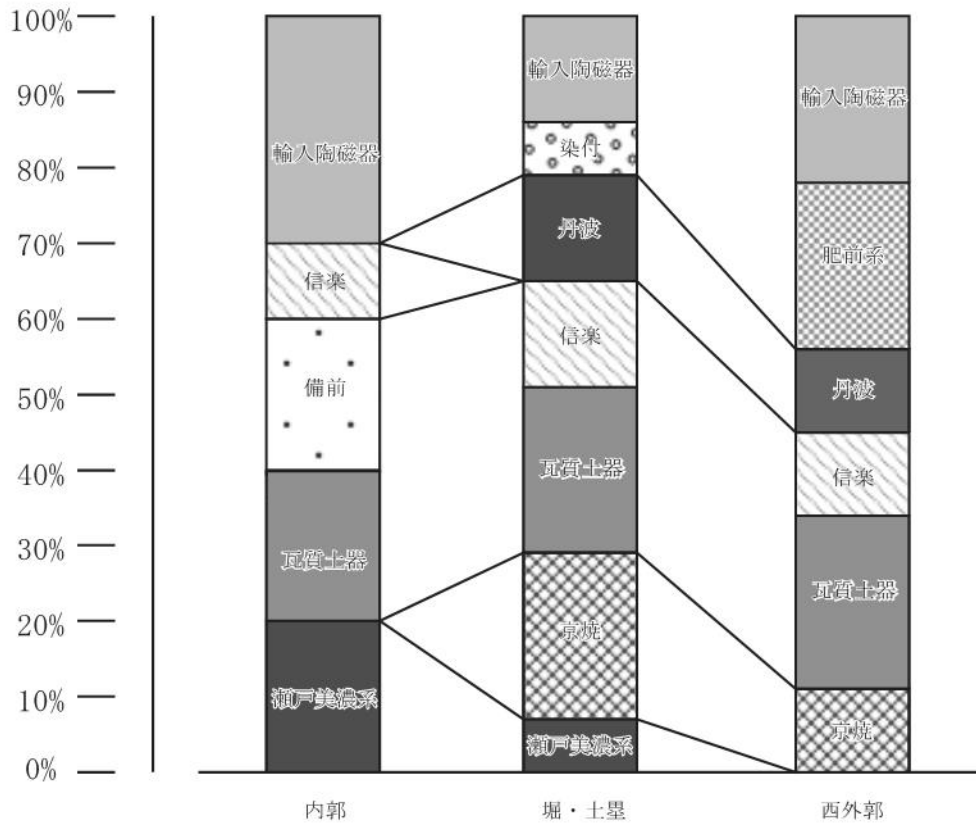


グラフ 5 上植野城跡

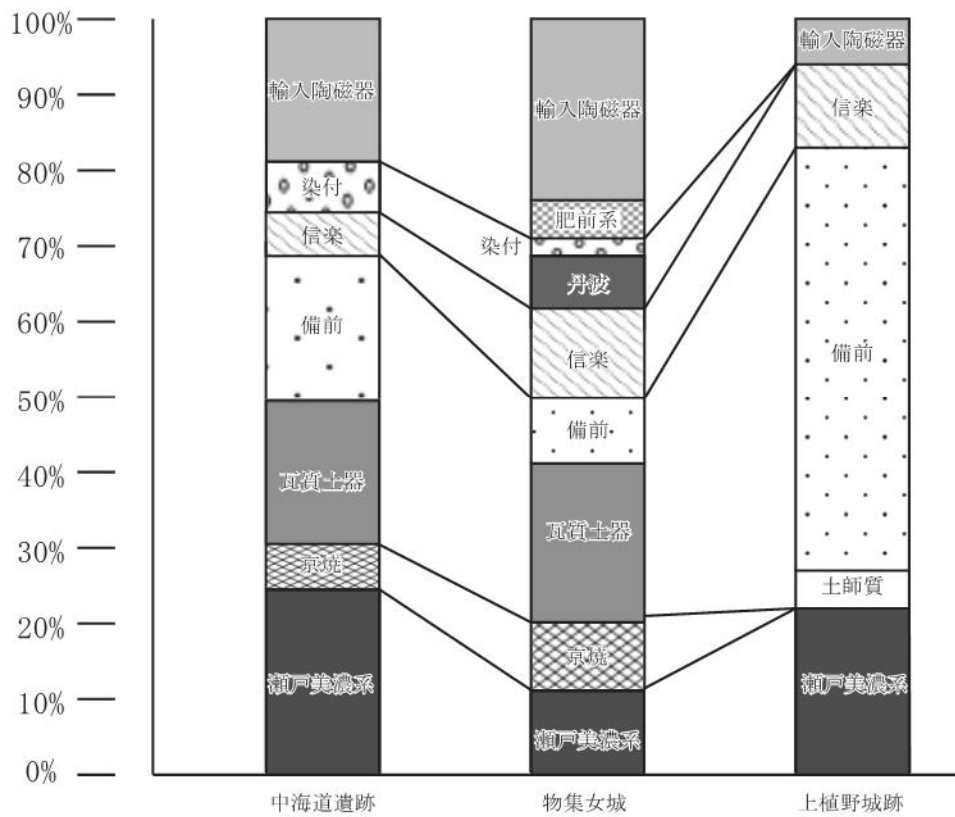


グラフ 6 物集女城跡

第 61 図 物集女城跡・中海道遺跡・上植野城跡 出土品内訳



グラフ7 物集女城跡 出土品 比率



グラフ8 各遺跡 出土品 比率

第62図 物集女城跡・中海道遺跡・上植野城跡 出土品比率

上植野城跡の出土傾向は、15 世紀から 16 世紀が中心となることがわかった。また、備前および瀬戸美濃系の製品が主体となり、丹波・信楽の製品は含まれない。内訳はグラフのとおりである。(第 61 図グラフ 5)

壺の比率が高い点は、調査区が貯蔵施設に該当することが考えられるため、資料の増加とともに出土傾向が変動する可能性は十分にある。

(2) 検討

〔中海道遺跡〕 物集女城跡と中海道遺跡は、15 世紀から 16 世紀の信楽・備前・丹波ならびに、瀬戸美濃系の製品が主体であった。組成においては、搦り鉢や羽釜といった日常雑器、そして天目茶碗などの茶陶関係で構成されることを確認した。ここに少量の中国製青磁が加わる。

また、物集女城跡の方が出土量が多いことから、中心施設と外郭という土地利用の違いが反映されていると考える。

一方で 17 世紀以降の遺物数が大きく減少するため、物集女城廃絶後は目立った土地利用はされなかったといえる。

〔上植野城跡〕 物集女城跡と異なり、丹波と信楽の製品が認められず、器種においては、貯蔵用の壺や搦り鉢などの日常雑器が中心となる。そこに、嗜好品や茶陶に関係する中国製青磁碗と、天目茶碗がわずかに含まれる。

現状で比較すると物集女城跡の方が、国内製品が豊富である(第 62 図グラフ 8)。しかし、上植野城跡の調査面積は約 250m²であり、物集女城跡は 1000m²を越えている。出土数や器種の差は、調査面積が影響している可能性が考えられる。このため、陶磁器類のみで、物集女城が良品を保有しているとは言い難い。

(3) まとめ

今回は限定的ではあるが、15 世紀から 16 世紀の陶磁器類を中心に、遺物の検討をおこなった。

検討の結果、物集女城跡・中海道遺跡・上植野城跡の遺物は、物集女城の存続時期と重なる製品が主体となることが把握できた。特に、内郭と土塁では、15 世紀から 16 世紀の製品に限られることから、物集女城の廃絶後は、人の生活痕跡が薄くなることがわかった。ただし、堀と中海道遺跡では、江戸時代の製品を含むことを考えると、外郭においては廃絶後も一定の土地利用がなされていたと考えられる。

また、同じ城館跡である上植野城跡と比較すると、向日市内における国内製品も、京都市内で流通している備前・信楽・丹波・瀬戸美濃系と、変わらないことが明らかになった。ただし、16 世紀末頃から流通する肥前系唐津等の製品は少ない。茶陶関係の製品も確認できることから、室町幕府や有力者との繋がりが陶磁器類からうかがえる。他方で、肥前系の製品が少ない点からは、流通が始まる 16 世紀末頃に物集女地域で人流の変化が起きていたことが想定される。

3 つの遺跡は、嗜好品や茶陶関係の残存率が悪い点が共通する。これは、中国製陶磁器や、桃山茶陶などの良品は、廃絶時に持ち出されている可能性が指摘できるのではなかろうか。

以上の検討から、物集女城は 15 世紀から機能し始め、16 世紀末頃には機能を停止していたと考えられる。これは文献で物集女忠重(宗入)が落命したと天正 3(1575)年と相違ない結果である。

物集女城廃絶後、耕作地として土地利用が始まると、現在に至るまで、大きな景観の変化はなかった

と考えられる。

註

- (註1) 向日市教委委員会渡辺博氏のご教示による。
- (註2) 向日市埋蔵文化財調査報告書第112集では、染付磁器と報告。形状と器壁の薄さ呉須の絵付けから、本原稿では中国製である青花と報告する。
- (註3) 向日市埋蔵文化財調査報告書第108集では、卸目付大皿と報告。卸目にあたる底部が欠損しているため、本稿では鉢と表記する。
- (註4) 向日市埋蔵文化財調査報告書第42集では、江戸時代以降、徐々に埋め立てられたと記載。

文献註

- (文献1) 山中章「中世の遺跡」『向日市史』上巻 向日市史編纂委員会 1983年
- (文献2) 國下多美樹・中塚良・山中章『物集女城跡 向日市埋蔵文化財調査報告書』第42集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 1997年
- (文献3) 國下多美樹・中塚良・辻本裕也「物集女城跡第2・3次(9ZMANY-2・3地区) 中海道遺跡第36・44次(3NNANK-36・44地区)～中海道遺跡中央部、物集女城東堀・張り出し部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第60集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献4) 山口均「物集女城跡第4次(9ZMANY-4地区)・中海道遺跡第47次(3NNANK-47地区)～物集女城跡東辺部、中海道遺跡中央部～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第46集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1998年
- (文献5) 山口均「物集女城跡第5次(9ZMANY-5地区)・中海道遺跡第48次(3NNANK-48地区)～物集女城跡南西部、中海道遺跡中央部～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1999年
- (文献6) 中島信親「物集女城跡第6次(9ZMANY-6地区)・中海道遺跡第55次(3NNANK-55地区)～物集女城跡郭南部、中海道遺跡中央部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第52集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 2001年
- (文献7) 松崎俊郎「物集女城跡第7次(9ZMANY-7地区)・中海道遺跡第59次(3NNANK-59地区)～物集女城跡西外郭、中海道遺跡中央部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第59集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 2003年
- (文献8) 中塚良「物集女城跡第8次(9ZMANY-8地区)・中海道遺跡第60次(3NNANK-60地区)～物集女城跡西外郭、中海道遺跡中東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第60集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献9) 中塚良「物集女城跡第9次(9ZMANY-9地区)・中海道遺跡第61次(3NNANK-61地区)～物集女城跡西外郭、中海道遺跡中央部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第63集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 2004年
- (文献10) 中島信親「物集女城跡第10次(9ZMANY-10地区)・中海道遺跡第72次(3NNANK-72地区)

- ～物集女城跡主郭、中海道遺跡中央部～発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 108 集 向日市教育委員会・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2018 年
- (文献 11) 中島信親「物集女城跡第 11 次 (9 Z N A N Y - 11 地区)・中海道遺跡第 74 次 (3 N N A N K - 74 地区)～物集女城跡主郭、中海道遺跡中央部～発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 112 集 向日市教育委員会・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2019 年
- (文献 12) 川上貢・浜崎一志「昭和 57 年度京都大学構内遺跡調査の概要』『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和 57 年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1984 年
- (文献 13) 國下多美樹「中海道遺跡第 18 次 (3 N N A N K - 18 地区)～中海道遺跡中央部～発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 60 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003 年
- (文献 14) 秋山浩三・高橋富子「中海道遺跡第 21 次 (3 N N A N K - 21 地区)～中海道遺跡東半部～発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 60 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003 年
- (文献 15) 秋山浩三・平林千佳「中海道遺跡第 22 次 (3 N N A N K - 22 地区)～中海道遺跡東半部～発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 60 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003 年
- (文献 16) 國下多美樹「中海道遺跡第 37 次 (3 N N A N K - 37 地区)～中海道遺跡中央部～発掘調査概要』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1997 年
- (文献 17) 國下多美樹「中海道遺跡第 38・39 次 (3 N N A N K - 38・39 地区)～中海道遺跡中央部～発掘調査概要』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 44 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1997 年
- (文献 18) 國下多美樹「中海道遺跡第 40 次 (3 N N A N K - 40 地区)～中海道遺跡中央部～発掘調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 60 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003 年
- (文献 19) 中塚良 「中海道遺跡第 73 次 (3 N N A N K - 73 地区)～中海道遺跡中央部～』『(公財)向日市埋蔵文化財センター年報 都城』29 (公財)向日市埋蔵文化財センター 2018 年
- (文献 20) 山口均「長岡宮跡第 431 次 (7 A N B U K - 4 地区)～北辺官衙 (北部)～発掘調査 乙訓地域の中世土器 (土師器皿) 編年について』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 71 集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2006 年
- (文献 21) 中塚良「向日市第 13128・14078 次 (7 A N F K Z 地区)～長岡京左京三条一坊四町、西小路遺跡～詳細分布調査報告』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 102 集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 2015 年

参考文献

- 中川和哉「中海道遺跡第 34 次調査』『京都府遺跡調査概報』第 70 冊 1996 年
- 田代弘「中海道遺跡第 42 次調査』『京都府遺跡調査概報』第 77 冊 1997 年
- 竹下士郎「中海道遺跡第 46 次調査』『京都府遺跡調査概報』第 81 冊 1998 年
- 藤井整「中海道遺跡第 49 次調査』『京都府遺跡調査概報』第 88 冊 1999 年
- 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的土器様式の成立と展開、7～19 世紀 -』京都編集工房 2005 年

- 『六古窯の時代』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 1998年
- 大宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』2000年
- 松田留美「中海道遺跡第30次（3NNANK－30地区）～中海道遺跡東～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第60集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- 中塚良「中海道遺跡第56次（3NNANK－56地区）～中海道遺跡北部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第60集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- 梅本康広「中海道遺跡第53次（3NNANK－53地区）～中海道遺跡（中央部）～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第71集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2006年
- 松崎俊郎「中海道遺跡第52・54次（3NNANK－52・54地区）～中海道遺跡（南西部）～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第67集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2005年
- 畑中章良「近江国（滋賀県）信楽窯（瓷器系）」『特別展 古陶の譜 中世のやきもの－六古窯とその周辺－』2010年
- 大槻伸「丹波国（兵庫県）丹波窯（瓷器系）北摂窯（須恵器系）」『特別展 古陶の譜 中世のやきもの－六古窯とその周辺－』2010年
- 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「三条せと物や町－桃山茶陶－」『京都市文化財ボックス』第30集 2016年
- 中塚良「長岡京跡左京第563次（7ANFKZ－7地区）～左京三条一坊四町、西小路遺跡、「上植野城」～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第103集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2016年
- 中川和哉・引原茂治・岡崎研一・綾部悠真・田原葉月「平安京跡（左京一条三坊二町）」『京都府遺跡調査報告集』第176集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018年
- 岩松保・古川匠・岸岡貴英・小山雅人・伊野近富・青木智史・田口肇・横山直範「平安京跡・聚楽第」『京都府遺跡調査報告集』第156集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013年
- 中川和哉・綾部悠真・引原茂治・岡崎研一・清水早織「寺町旧域・法成寺跡」『京都府遺跡調査報告集』第172集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018年